右左口

田信玄用ル處ノ三ツ巻ノ鞘ニ改メ給ヒ、信玄ノ兵法ヲ傳ヘ得サセラレタルト語リ給フ、（小幡景憲話、）國中ノ士民糧米柴薪ヲ獻ズ、小尾祐光、津金修理胤久、津金ノ郷ニ在リシガ、北條氏直ヨリ招クト雖モ應ゼズ、妻子以下駿府ヘ獻ズ、神祖是ヲ賞シ玉ヒ、知行百貫文、現米百俵ヲ印書ヲ以テ賜フ、

〔甲斐國志〕（四十二古蹟部五、八代郡中郡筋）假御殿蹟（右左口村、）古印書及諸記錄ニ、姥口又祖母口、家忠日記ニハ、上口ト記セリ、今右左口ニ作ル、此處ハ、迦葉、七覺瀧戸ノ諸山屋宇ノ如ク、西北ヘ米倉、間門、向山等ノ岡巒圍繞シテ空ヲ覆ヒ、洞天ニ入カ如シ、因テ姥口ノ名アルカ、壘壁ヲ待タス、自然ノ要害ナリ、淺利、向山ノ二莊、此阪路ヲ分界トス、迦葉阪ハ登路壹里許、頂上ニ於テ臨覽スレハ、三郡ノ勝景目下ニ在リ、山川茂林沃野ノ富、古ヨリ近蜀ノ稱アリ、信然ト謂フヘシ、前ニハ勝山、小山、市川ノ城址三足ニ跨ガリ、笛吹川ヲ廻帶セリ、直北ニ府城ヲ望ム、古府、新府ノ墟モ掌上ニアリ、孔道四境ヘ亘リ、右スレハ石禾、（東北三里ニアリ、）八代ナリ、東郡ヘ馳騁スヘシ、左スレハ市川、（三里ニ近シ、）青柳ヨリ西郡ニ達ス、三河津（鰍澤、青柳、黑澤ヲ云、）ノ隘口、河内ノ長棧十八灘、後ハ九一色郷ノ崎嶇重闢、仰ケハ富士北面千秋ノ雪皎然タリ、天正壬午四月十日、織田右府此ニ一

御殿場

家康右左口ニ抵ル

宿シテ凱旋ス、同年七月、神祖又此路ヨリ御入國アリ、同九日、迦葉阪ニ臨マセ玉フ、國人簞食シテ路ニ迎奉ル、本村ノ里長等、駿州人穴村ニ至リ、御駕ヲ迎ヘ、蘆川ヲ濟シ、道ヲ修シ、阪上ニ假屋ヲ構ヘ、茶ヲ獻セシト云、頂ヨリ稍下リ、御茶屋ト云處アリテ、眺望佳ナリ、村上ニ假御殿ヲ建ツ、（南ナ上ト云、地形高下ニヨルノ稱ナリ、）今此處ヲ御殿場ト稱シ、東照宮ノ祉ヲ立タリ、七月廿三日ヲ以テ祭時トス、（是日ハ、本村諸役免許ノ御朱印賜リシ日ナリ、承應中ノ免狀ニ、高六石貳斗四升御殿敷地引トアル是ナリ、）廿四日マテ此所ニ御逗留ナリ、（諸錄ニ、九日古府御著陣トアルハ非ナリ、○中略、家康、岡部正綱ヲシテ、下山ニ城カシムルコト、本多信俊ヲシテ、河尻秀隆ヲ訪ハシムルコト、大須賀康高ヲシテ、甲斐ニ入ラシメ、酒井忠次ヲシテ信濃ニ入ラシムルコト等ニカヽル、）七月三日、神祖御出陣アリ、駿州ノ田中、長久保、興國寺、沼津等ノ城ヲ諸士ニ封授シ、天神川ニ守兵ヲ置キ、御手配リ堅固ニシ、同月七日、大宮ニ御止宿、八日精進、九日右左口ニ入御ス、（家忠日記、九日、家忠庄地ニ陣ストアリ、御跡ヲ押テ入リ來ルナリ、此後古府、新府ノ條ニ、家忠ノ事ヲモ記スレド、家忠始終此所ノ警固ニ在陣セシ趣ニ見タリ、）十二日、九一色郷ニ、諸役免許ノ御朱印ヲ賜フ、同日、渡邊囚獄佐ニ、九一色衆十七騎ヲ附屬シ、連名御朱印ヲ賜ハリ、本栖ノ關ヲ守リ、駿州路ノ警固ヲ命セラル、（士庶部ニ委シ、）十四日、酒井ヲ信州ニ封シ玉フ、此時岡部幷穴山衆古府ニアリ、石川、本多ハ若神子ニ張翼ス、大久保ハ新府ヨリ栢原ヘ向ヒ、酒井

古府ニ入ル

ハ臺原ニ陣ス、委クハ逸見筋御對陣ノ條下ニ記セリ、上曾根村勝山ノ舊壘ヲ修シ、服部半藏ニ伊賀組ヲ添テ守ラシム、高家ノ小山城ニハ、鳥井彥右衞門ヲ籠ラセ、松平玄蕃頭、內藤彌次右衞門、三枝土佐守ハ、東郡大野ノ砦ニアリ、市川ハ始ヨリ大須賀ノ屯所ナリ、關原讃トテ、迦葉阪ノ西ヘ相井、下蘆川村ヨリ關原村ヘ越ル阪路アリ、古時此村ニ關砦アリシ故ニ、村名ヲ得タリト云、當時モ此阪路ニ守兵ヲ置玉シト、今其跡ヲ木戸口ト呼フ、如此御手置アリ、御先手衆ノ取敷タル上ニテ、廿四日、或云、廿三日、右左口御出駕、中畠ノ神祭ヲ禮シ玉フ、其日龍花院ニ御立入、又御止宿トモ云フ、古府ニ御陣ヲ移サレ、一條ノ舊館ニ入ラセラル、諸錄ニ、九日、古府御著陣トアレ𪜈、前ニ北條ノ大兵手ヲ分テ、諸口ニ向ヘリ、豈卽日輕シク古府マテ深入シ玉ハンヤ、其上廿四日、又古府ヘ御陣ヲ移サルトモ記シタレバ、何ニ因テ再ヒ回旋シテ古府ニ入玉ハンヤ、今校定スルニ、廿四日マテハ、右左口御滯坐ナリ、八月十二日、右左口ノ山ニ北條ノ勢侵入タルヲ、本村ヨリ注進シケレハ、鳥居元忠、內藤信成、水野勝成、松平清宗等馳付一戰アリシハ、今猿畑駒立ト云處ナリト云、家忠日記、北條左衞門大夫三阪ヨリ出テ、古府ヲ襲ントテ此山ニ陣ストアリ、三阪、黑駒ヨリ古府ハ北西ナリ、右左口ハ南西ナリ、何ソ其方向ヲ失ヘルヤ、編年集成ニハ、北條左衞門佐氏忠ニ作ル、黑駒ヲ押出シ、市川ノ姥口ト云山ニ引取トアリ、愈其方向ヲ違ヘリ、此合戰ニ北條勢御阪ニ引入レ黑駒、藤木ニテ戰シ事ヲ載ス、諸錄皆同シ、右左口山ニ居テ、古府ヨリ來ル兵ト戰ヒ、黑阪、御阪ヘ引入ヘキ地形ニアラズ、方角ヲ不知妄ニ記スルナリ、況ヤ中途ニ小山城アリ、元來御阪路ノ押ナリ、右左口山ハ當時ノ御本營ニ等シキ處ニテ、山河ノ固如斯、豈容易ニ侵スコトヲ得ベケンヤ、城山ト云ハ、阪路ヨリ差東ノ山腹ニアリ松平主殿助家忠、翌未年マテ警固セシ處ナリ、○中略、家忠、善光寺ニ赴クコト、勝山城ヲ修スルコト、右左口ニ陣ヲ移スコト、大久保忠世等甲斐ニ止マルコト等ニカヽル、此後天正十七年マテニ、本州御巡視アリシヿ五度、今年三月又七月共ニ都合七度入御ナサレシナリ、此道ヲ數度御通行アリシ趣ナレ𪜈、無事ナレハ記スヘキヿナシ、本村御入國初ノ地タルヲ以テ、毎年正月十七日、久能山御祭禮ニ、里長二人麻上下著シ、糊入紙一束ヲ獻上シ、拜禮ニ出ツ、玉仙院ニテ料理ヲ賜フト云、本村ノ御朱印文中ニ、祖母口鄉之在家四十七間、往還ノ傳馬勤之條、關鹽、相物其外諸役如前々令免許ト云云、同十八年、羽柴少將ノ黑印ニハ、鹽干物トアリ、本州並信州ヘモ、駿河ヨリ鹽ヲ運フニ、河內ノ通船ナキ以前ハ、多ク此路ニ係リキ、古時ハ關所往來凡テ役錢アリ、相物トハ商物ノ事ナリト、康富記ニ見タリ、右御印章庫ヲ村內ニ建テ藏之、

家康舊ニ仍リ右左口ノ諸役ヲ免除ス

○家康ノ部將大須賀康高、酒井忠次等、甲斐、信濃ニ入リ、武田勝賴ノ遺臣ヲ招降スルコト、勝賴ノ遺臣飯島傑叟等、家康ニ屬シ、誓書ヲ下條賴安ニ納ル、コト、駒井昌直等、成瀨正一、日下部定好ニ就キテ、誓書ヲ家

有泉大學助先ヅ甲斐ニ入ル

乙骨太郎左衞門家康ノ爲ニ諏訪賴忠ニ使ス

康ニ致スコト、家康、米倉忠繼、折井次昌等、武川衆ヲ招降スルコト、及ビ知久賴氏ヲシテ、所領ヲ安堵セシメ、津金胤久、小尾祐光、初鹿野昌久等質ヲ致シテ家康ニ屬スルコト等、便宜左ニ合敍ス、

〔乙骨太郎左衞門覺書〕一甲州信玄公之［　　　］罷在候、甲州くつれの後も、乙骨与申所ニ引込罷在候、其節御所樣甲刕□御打入之時在々番(マヽ)大塚(須賀下同ジ)五郎左衞門殿、大久保七郎右衞門殿、酒井佐(左)右衞門尉殿、岡部二郎右衞門殿、白岩(平)主計(親吉)殿、御ほん(武田万千代信吉)樣、同御内有泉大學殿、本多彌(正信)八郎殿、右之衆先手ニ被仰付候事、

一有泉大學殿、何ゟよりも先へ被參候時、ゑうと靑木彌惣左衞門引合ニ而、大學殿ニ知人ニ罷成候、大學殿取成以、右七人之衆へ懸御目候、其時甲州信濃之事御尋被成候間、我等委存候と申候へも、左候ハヽ、諏訪(賴忠)殿ゟ使を賴度由被仰候間、其儀ニ而候ハヽ、御馬を近ゟ御よせ可被成と申候へハ、則我等屋敷ニ御馬を御立被成候、其時諏訪殿へ御狀之御使ニ、日之内ニ三度參候、二度ハ御返事御座候、三度目之御使之時、諏訪殿被仰候ハ、太郎左衞門者分別才覺者成間、我等之談合相手ニもゐきと思るヽ所ニ、むこき者ニ而、遠國之者之手ニ付、則人數をも我ゟ屋敷ニ引込、其上我等所へ之使も、こともの［　　］被仰、太郎左衞門ニハさうつきをすへき者なれ共、湯をけをくとせよと被仰候、其時御内之衆我等ニつけ申樣も、貴殿をたゆかに打へき支度候間、急のけよと申候間、早々罷歸候、其時御使やうびとして、大塚五郎左衞門殿御取次、鐵炮三丁、弓三張、長柄三筋被下候事、

〔三河物語〕三　然間、大すゝ五郎左、大久保七郎右衞門尉、本田豐後親子、石河長(門)度、岡部次郎右衞門尉、あな山衆、若(若御子)見こ迄押出す、然る處よ、七郎右衞門尉方迄、六(武川)河衆、おび(小尾)、つが(津金)ま衆、うけよりて先がけをもる、然る間御出馬程ちうければ、此五六手之衆ハもとへ押騎(寄)ける、大久保七郎右衞門尉さいかくまて、もとおも引付ゝり、いなへハ、大草とちく(知久賴氏)を、是も七郎右衞門尉が御意を得而、本領を出し而引付ゝり、然間下ぢ(下條賴安)やうおも七郎右衞門尉が引付ゝり、○上下略、河尻秀隆一揆ニ殺サルヽコト、及ビ家康、柴田康忠等ヲシテ、依田信蕃ヲ助ケ、佐久郡ヲ固守セシムルコトニカヽル、六月十八日、及ビ本月十二日ノ條ニ收ム、寛政重修諸家譜大久保忠世譜、忠世、諏訪、大草、知久、下條ノ外、小笠原信嶺ヲモ歸服セシムルコトニ作ル、

大久保忠世家康ノ爲ニ信濃ノ諸氏ヲ誘降ス

〔甲斐國志〕百人物部九　大須賀五郎左衞門尉康高　六月廿日頃、神祖ノ爲御先手、自河内入來リ、市川鄉ニ屯メ、暫ラク國事ヲ沙汰ス、今所閱廿四日以

忠世ノ信濃ニ於ケル軍功

後ノ印書所在ニ藏ム、墨印中康高二字上ニ大須加トアリ、小笠原與左衛門奉之、或ハ村九兵衛トモアリ、河住氏所與、同廿三日有大學奉之ト記セリ、於下山出之ナルベシ、鷹尾寺、同廿日トアル一章ハ、書法モ異躰ナリ、合考ルニ、廿日以前到下山ナランカ、先是岡部次郎右衛門奉命來下山事アリ、古蹟部ニ委シ、成瀬吉右衛門、日下部兵右衛門、此手ニ在テ御政事ニ與カル、七八月ノ際ヨリ、往々連名ノ文書アリ、後兩奉行ト稱ス、岡部治郎右衛門、曾根下野守等ハ、疾ク幕下ニ歸メ、此時自分ノ印書モ出セリ、同七月九日、神祖中道ヨリ御入リ姥口ニ著セラレ、同十二日、九一色在住ノ士並ニ郷中諸役免許ノ御朱印ヲ賜フ、大久保新十郎後云相模守忠隣、奉之、同二十四日マテ、姥口ニ御滯留ナリ、是ヲ最初トメ、武田ノ諸士盡ク歸服シ奉リ、本領安堵ノ御朱印ヲ賜ハル、井伊兵部少輔、(柴)芝田七九郎、安倍善九郎ノ輩、御取次ノ人ニハ定マリ無シ、同八月、甲信ノ士ニ起請文ヲ命ゼラル、慧林寺所藏田澤源太郎ナル者寫本一軸ニ所載、六百有餘人ノ名アリ、本州ニ藏ムル御朱印ニ有福德ノ二字、以後皆同シ、於逸見筋、與北條氏直御對陣ノ事古蹟部ニ委シ、

〔寛永諸家系圖傳〕九十三　大久保忠世七郎右衛門尉、(天正)同十年、大權現甲州をせめたまふとき、忠世先鉾(鋒カ)として信州にいたり、敵軍とあひたゝかふ、國中の者風をのぞみておれになびく、それより信州の國士、先方衆と號す、又敵をなすものおほあり、忠世對陣して、今年より同十三年にいたり、合戰する事やまず、あるひは敵壘をせめやぶり、あるひは和睦を議してこれを服する事もあれどおほし、それあひだの戰功あまたかぞふるにあらず、家人等をの〳〵軍忠をつけはま、尤著るの五六人、大權現御感狀をたまふ、○上下略

忠世甲斐ニ入ル

〔佐野本系圖〕二十一大久保　忠世　大久保新十郎、改七郎右衛門、○中略同六月、依信長公生害諸國起逆、六月二十二日、神君令忠世赴甲州、忠世陳于甲州上口、欲治近邊、其外諸將赴甲州、忠世諏方小太郎賴忠後安藝守、屬味方、

岡部正綱惠林寺ヲ修理シ勝

〔寛政重修諸家譜〕八百七十一　岡部正綱次郎右衛門、東照宮明智光秀を御誅伐なるべしとて、六月七日、正綱に御書をたまふ、それとき織田家の臣川尻肥前守鎭吉(秀隆)甲斐國を守れる處、鄉民等川尻を殺害してまた大に亂る、これにより先穴山勢をして之れを鎭めしめむことを議せらる、正綱がいはく、彼國の人民、武田家の恩をかうぶること久し、今勝頼沒落して小山田が爲に自害をし事を怨み憤る、もし穴山の兵をしてかの國に行しめは、國人おほきて彼等が勝頼に二心ありしを恨み、怨にこれを害し、上杉又は北條家に歸服せむこともはかりがたし、しかれは正綱、曾根下野守正清(昌世)とともに彼

頼自殺ノ地ニ寺ヲ建テント進言ス

家康正綱ト曾根昌世トヲシテ甲斐ニ赴カシム

成瀨正一武川衆ヲ招ク

地にいたり、信玄か菩提所惠林寺を修理し、勝頼か自滅の地に寺をいとなみ、兩將の靈を祭らは、國民かならすその恩惠を感し、歸服せん事うたかひなし、しかる時は信濃國も亦相繼て命に應すへしとなり、東照宮これをしかりとしたまひ、正清及ひ正綱に命して彼地におもむかしめたまふ、これによりて、かたのことく執行なし、また本領安堵の書を諸士にあたへしかは、士民等大によろこひ、こと〳〵く御麾下に屬す、〇上下略、家康、正綱ヲシテ、甲斐下山ニ城カシムルコト、六月六日ノ條ニ見ユ、

〔寛永諸家系圖傳〕百四十四　成瀨一齋吉右衛門、（天正）同十年武田敗亡のとき、大權現市川におはしませは、これよりさきに武河の士と一齋好を通するにより、彼か出亡をなせれは、行てこれをとふに、隣里人なきによりて、彼門に書していはく、市川にきたり、一齋をたつぬへしとなり、其夜武河六十騎の組頭米倉主計助、折井市左衛門きたる、すなはち大權現に達し、まみへたてまつらしむ、其夜兩人武河にかへり、盡武河の士の人質をたてまつる、同年七月、大權現兵を發し甲州に入給ひ、新府におはしませは、北條氏直もまた甲斐信濃をしたかへんため、四萬騎の兵を卒て甲州に入、若御子に陣をとり、新府に

根來足輕

正一甲斐ノ國政ニ與ル

日下部定好大須賀康高ニ從ヒテ甲斐ニ入ル

定好甲斐ノ國政ニ與ル

家康勝頼ノ遺臣ヲ保護ス

對陣する事數十日、その間に、一齋、北條かしのひのもの二人生捕て、陣中に礫には、大權現北條と和睦有て、互に兵を引て國に歸りたまふ、其後根來足輕百人を一齋に預らる、平岩主計頭親吉と共に甲州の制法をさため、九年在住して國中靜謐す、〇上下略

〔寛政重修諸家譜〕六百七十　日下部定好兵右衛門、（天正）十年、織田右府事あるの後、甲信の兩國穩ならは、これによりて、東照宮の仰をうけて、成瀨正一、岡部正綱等とともに、大須賀康高にそへられ、彼地に赴き、其騷動をしつめ、甲府の衆をして、御味方に加はらしむ、十二月、甲信兩國の諸士、遠江國秋葉寺にをいて、誓詞をたてまつるのとき、正一とともにこの事をうけたまはる、二十一日、平岩親吉をして、甲府の郡代たらしめ、定好奉行職となりて國政を沙汰す、〇上下略

〔濱松御在城記〕天正十壬午

一茲年信長公御父子、權現樣甲州ヱ御攻入、勝頼父子ヲ初、甲陽ノ諸士御討果被成候、信長公ハ、甲州方ノ士ヲ根ヲ斷樣ニ被成候得共、權現樣ハ、御憐愍ヲ被加、剩信長公ニ御隱シ、甲州衆ヲ遠州ノ内ニ御入置被成、御扶持被下候、

勝頼遺臣ノ起請文

頼安家康ニ叛カバ頼安ニ同心セザルベシ

飯島衆

依之三河衆、遠州衆同前ニ御用ニモ立被申候、遠州ニ於テ、甲州衆、信州衆ニ被仰付候御誓詞、秋葉ノ社ニ納リ御座候ヲ、少納言其寫ヲ借候而記上申候、

甲信兩國信玄衆被召抱時指上誓紙寫

敬白起請文之事

一奉對下條兵庫助殿、毛頭如在申間鋪候、然共家康樣ゟ兵庫助殿御無沙汰御座候者、同心申間鋪候事、

一加樣ニ得御意候上者、軍役等聊無沙汰申間敷事、

一大細共ニ御指圖不違、可走廻候事、

右條々於僞者、蒙梵天帝釋四大天王、焔魔法王五道之宜(冥)官、熊野三所權現、白山妙理大權現、春日大明神、富士淺間大菩薩、伊豆箱根兩所權現、三嶋大明神、八幡大菩薩、別而當國鎭守諏訪兩宮法王上下大明神、鉢地三所大權現、貴船大明神、天滿大自在天神御罰、於今生黒(黒脱カ)白二病、於來世者阿鼻無間之底可墮在者也、仍起請文如件、

天正十年壬午七月六日

飯島衆

飯嶋入道傑叟

片切意釣

飯嶋新助爲吉

同主膳佐爲長

同中務爲若

大嶋之甚七郎

北原七左衛門

下條兵庫助殿

下條頼安

片切衆

中澤衆

片切衆起請一紙

意清　齋右近之助　意安　齋豐後

出雲　稲葉彥之丞　七兵衛

中澤衆起請一紙

高見孫兵衛　曾藏(マヽ)九兵衛　福田休左衛門　大窪與左衛門

竹村次郎右衛門　高田與六郎　菅沼治右衛門　伊藤筑後守次吉

中山彌左衛門　大窪善右衛門　福村七右衛門　木瀨助兵衛

大草休齋
同家中衆
いなへ衆
上穗衆
赤澤衆
質ヲ免除ス

大草休齋起請一紙
同家中衆起請一紙
片切意釣西鎌　同孫左衛門爲義　同　宗三　北村掃部左衛門
上泥右近　鹽澤佐左衛門　新居万助　大澤六兵衛
片切源三昌忠　橋部十郎左衛門貞綱　松平仁左衛門　南嶋與左衛門
米山彥七郎　宮下四郎左衛門光延　北原七左衛門定光
いなへ衆起請一帋
春日治部少輔玄定　小井木四郎右衛門親綱　御薗彌七郎滿定　上穗衆上板爲昌
赤澤衆北澤肥前　下平傳右衛門

敬白起請文（之脱カ）
一質物之儀御赦免、生々世々忝奉存候、此上者奉對賴安樣、盡々未來毛頭疎略不存、抛身命、無二御奉公可申上事、
一龍千代殿取立申、是も疎意あらせましく候事、
一弟ニ候もの御普代同意（樣カ）、御被官ニ進上可申上事、

大島助之丞
虛病自由ヲ構ヘズ
國ヲ見限リ他國セシ者ニハ合力セズ
駒井昌直

右三ヶ條於僞者、梵天〔　　〕
天正十年午七月十二日　大島助之丞
下條兵庫助殿 披露

信玄親類衆譜代衆惣家中衆家康樣ゟ被召抱候時之起請
敬白起請文之事
一逆心申儀不可有之、縱雖爲親子兄弟、存別儀者則言上可申事、
一御働之節、虛病幷不相構自由、御日限次第、出陣可申事、
一軍法相背申間鋪事、
一御使被下置候刻、其仁不存貴賤違背（申間鋪事脱カ）
一自然爲御使者、何方へ被仰付候共、樣躰之趣、無依怙有樣可申上事、
一御國を見限、何（他カ）國仕候者ニ、一切合力已下申間鋪事、
右之條々於相背者、親子兄弟被成御成敗候共、御恨存間鋪候事、若此旨僞申ニをいてハ、可蒙梵天〔　　〕
天正十年戊戌八月廿一日
駒井右京進昌直

今福新右衛門（昌常脱カ）

御奉行
成瀬吉（正一）右衛門殿
日下部（定好）兵部助殿

一 青沼助兵衛（尉）忠吉 跡部民部助（大輔）昌秀 曾禰（根）下總（野）守昌世 三枝監物吉親
一 同平右衛門（尉）昌重 小菅又八郎信有 跡部九郎右衛門（尉）昌忠 油川彌平（次）豐子
一 栗原日向守昌頭 川（河）窪新十良信正 油川刑部（少輔）信守 大井監物信言
一 岩手助九郎信眞 下曾禰（根）源六信辰 ○家忠日記増補ニハ、是ヲ武田親族衆ト云フトアリ、

信玄近習衆
一 土屋三郎右衛門（尉） 岩間將監 窪嶋平五郎正吉 有賀式部助（少輔）昌元
一 高森（林）又十良 土屋源左衛門昌久 須田宗市（惣市）郎勝滿 市川内膳（正）清成
一 石原孫八郎 飯室庄左衛門（尉） 同名與左衛門（尉） 西川（河西）孫左（右）衛門（尉）
一 阿部（河野）庄左衛門（尉） 塚原次左衛門（尉） 中澤主稅助 孫田（兼田權）孫左衛門（尉）
一 御手洗曾（藤）十郎 横地彌三郎（兵衛尉） 内藤織部（正） 横地喜三郎
一 田（臼）澤久助 永井又五郎 水上六郎兵衛（尉） 向山新之丞

一 窪嶋與市（一郎） 阿（安）部源太郎 保科新兵衛（尉） 小田切大隅守
一 山本主殿介（助） 杉（松）月齋延子 駒井宮内太輔 工藤市兵衛（尉）
一 坂本武兵衛 佐々木肥後守 塚原六右衛門 葉田四郎右衛門
一 窪田宗左衛門重吉 小見山又七郎昌親 原三右衛門（尉） 山本源左衛門（三郎）
一 跡部源左衛門（尉） 高室清三郎 米倉隼人助（造酒之丞） 同名半兵衛（尉）
一 午（貝）奥織部（正） 岡（岡野神）甚太郎 平林藤助 山中主水助（正）
一 窪田内記 中澤宗（惣）九郎 三田大藏少輔 内藤源助
一 飯田右馬助 今福求女（之）助 同名彥藤 五味主殿介（助）
一 保坂監物 午（貝）與（惣）三左衛門（尉） 工藤彌左衛門（尉） 同名甚太郎
一 市川宮内介（少輔） 同名彥（喜）三郎 小畠藤五郎 青沼縫殿助
一 雨（南）宮十兵衛（尉） 風祭善（兵）介（助） 雨（南）角十左衛門（尉） 土屋宗八郎
一 萩原惣兵衛 三神宗左衛門 五味太郎左衛門（おつこつ衆） ○家忠日記増補ニハ、土屋源左衛門昌久、坂本武兵衛ヨリ小見山又七郎昌親マデ六人、及ビ土屋宗八郎以下四人ヲ闕ク、

遠山衆
一 五味與左衛門（尉） 大嶋五兵衛（尉） 惣田加兵衛（尉） 須田市右衛門（尉）

窪田彌七郎　横森甚三郎　原監物介（監物）　齋藤四郎左衛門（尉）
古屋新九郎　藥袋勘左衛門（尉）　鮎川次郎左衛門（尉）　藥袋與介（助）
（須）飯田淡路（守）　原田仁兵衛（尉）　細野新右衛門（尉）　長谷部又兵衛
窪田右近介　薗田形部介（刑カ）　竹内（山）左吉　藤卷（玄）孫八郎（四）
石井三右衛門（尉）　大窪四郎兵衛（尉）　同名新兵衛（尉）　山田宗（惣）右衛門（尉）
小野喜兵衛（尉）　岩下清八郎　平井作左衛門（尉）　萩原大炊左衛門（助）
中田清兵衛（尉）　丹澤主計介（助）　堀（坪）内彥作（一郎）　中（田）村新兵衛（尉）
（三）保科孫兵衛（尉）　宮田三郎右衛門　平林十左衛門　若原才三郎　○家忠日記增補ニハ、薗田刑部介及ビ宮田三郎右衛門以下三人ヲ闕キ、郷場主税助ヲ加フ、

御嶽衆

相原内匠介（助）　内藤縫殿介（織部正）　深澤市左衛門（尉）　渡部三左衛門（尉）
相原兵部左衛門（尉）　下條九郎左衛門（九左衛門尉）　千野又右衛門（尉）　同名七左衛門（尉）
相原宗（惣）左衛門（尉）　同名才（次）兵衛（尉）　同名靱負（助）　下條作右衛門（兵衛尉）
同名彌兵衛（尉）　窪田（南）藤三郎　同名仁兵衛　千野左門
鹽入久右（左）衛門（尉）　石原治左（右）衛門（尉）　相原九左衛門（尉）　井上市右衛門（尉）　○家忠日記增補ニハ、窪田仁兵衛ヲ闕キ、蘆澤左近、松原宮内太夫、相原次左衛門尉ヲ加フ、

津金衆

小尾監物　小池筑前　津金修理　跡部又十郎
小尾彥五郎　○家忠日記增補ニハ、コノ津金衆ヲ闕ク、

栗原衆

名取肥後守　林主水介（正）　駒井兵部（少輔）　岩村（右）源五左衛門（尉）
下條主水（正）　保（穗）坂清左衛門（尉）　曾（岩）禰（根）清次（清兵衛尉）　若原（名）新九郎
小林新三郎　桂（鷹）田三郎左（右）衛門（尉）　風間作左衛門（尉）　岡勘左衛門（兵衛尉）
（羽）羽中田善（蓮）次郎　内田善十郎　窪（萩）原次兵衛（尉）　板（坂）本作右衛門（尉）
（長）永田九郎右衛門（助）　金（倉）森主水（正）　神（宮）宮寺右近介（右近）　羽中田四郎兵衛
同名次右衛門　寺崎（島）孫右衛門（尉）　岡久次郎（太郎次郎）　渡邊宗（惣）兵衛（尉）
小池七郎右衛門（尉）　丸山縫殿介　○家忠日記增補ニハ、小林新三郎、羽中田四郎兵衛、同名次右衛門、丸山縫殿介ヲ闕ク、

一條衆

水上（藤）市郎兵衛（尉）　和田主計介（助）　澤（須）田長介　深澤（津）藤三郎（兵衛尉）

窪(藤)簡右衛門(尉)　大嶋平五郎　中澤與八郎　村田市右(左)衛門(尉)
相(松原)澤平助　千野源之丞　中澤善七郎　窪田小七郎
丸山市兵衛(尉)　鮎澤主水(正)　永澤彌(孫左衛門尉)三左衛門　飯田宗(惣)兵衛(尉)
大澤半兵衛(左衛門尉)　向山宮内右衛門(尉)　永澤雅樂介(助)　相(小)澤彌兵衛(尉)
風間簡(藤)七郎　大村六右衛門(尉)　永澤彌右衛門(尉)　萩野助之丞
河西作右衛門(尉)　細田六三　依田善五郎　金子助右衛門(尉)
中村九右衛門　石田善介(助)　塚本源介(助)　風間七郎右衛門(尉)
依田縫殿丞　同(右)名小兵衛(尉)　細野佐左衛門(尉)　石黑五(與惣)兵衛(尉)
金丸簡(藤七郎)介　横(櫛)森織部(正)　雨宮七右(左)衛門(尉)　野澤彌左衛門(尉)
井(尾)尻源(源三郎)右衛門　山本源三郎　四(志)村小兵衛(尉)　水上久助
内田新十郎　相(鮎)澤猪之助　青柳平五郎　樋口次左衛門(尉)
内田又三郎　上野助六郎(之丞)　市瀬清四郎　保(穗)坂彌介(助)
鈴木與三兵衛(尉)　小瀬村右近介(右近)　高野五右衛門(尉)　桂原内匠介
岡市之丞　藥袋(代)源七郎　保(穗)坂彥次郎　窪田久右衛門(尉)
中村孫兵衛(尉)　小宮山新七郎　野澤平(次)次郎(郷)　古屋新八(五)郎

大窪權右衛門(尉)　岩下(本)又次郎　辻(五)神之介(内)　高野與十郎
内藤久右(左)衛門(尉)　塚原簡(藤)八郎〇家忠日記増補ニハ、千野源之丞、細田六三、中村九右衛門、桂原内匠介、岡市之丞、高野與十郎ヲ闕キ、廣原庄右衛門尉、筒井藤七郎ヲ加フ、

備中衆

備中衆〇家忠日記増補ニハ小山田衆トアリ、
三木四郎右衛門(助左衛門尉)　高橋治(次)左衛門(尉)　岩間與右衛門　同與三兵衛
谷尾加(惣)兵衛(尉)　石黑吉兵衛(尉)　矢田佐左衛門(尉)　庭(廣)瀬主計介(助)
同名市介(助)　塚本助四(七)郎　福嶋三郎右衛門(尉)　竹田助右衛門(十郎)
原(原)田(助兵衛尉)兵右衛門　同名半兵衛(尉)　大澤右近　坂本傳介(助)
野澤仁(加)右衛門(尉)　高野彌左衛門(尉)　西山金藏(兵衛尉)　河野助太夫(右衛門尉)
三科宗(惣七)四郎　甘利民部左衛門(尉)　切原宮内介(少輔)　野口又左衛門(尉)〇家忠日記増補ニハ、岩間與右衛門、同與三兵衛、大澤右近ヲ闕キ、岩間與一郎、長澤左兵衛尉、山田源三郎ヲ加フ、

信玄直參衆

信玄直參衆
西山十右衛門(尉)　同名又六郎　跡(阿)部源十(一)郎　藥袋靱負(助)
西山宗藏　山本十左衛門(尉)　西山八兵衛(尉)

小十人頭

〇コノ所一行空白、家忠日記増補ニハ「小十人頭」トアリ、

萩原甚之丞　窪田助之丞　同名簡（藤）右衛門（尉）　原半左衛門
中村簡（藤）六郎　石坂簡（藤）兵衛（尉）　志村又左衛門（尉）　河野傳之丞〇家忠日記増
補ニハ、原半左衛門ヲ闕キ、山本孫左衛門尉ヲ加フ、

同子共衆

萩原監物　窪田吉九郎　原新七郎　細田六之丞
同名助十郎　志村平四郎　石坂監物　同名勘四郎
山本新八郎　同名彌三左衛門　萩原右近介〇家忠日記増補ニハ、コノ子共衆ヲ闕ク、

典厩衆

土屋才兵衛（尉）　同名與介（助）　澤（深）登左近介（太夫）　水上簡（藤）六郎
井上三郎兵衛（尉）　丸山治部右衛門（尉）　向山釆（采）女介（女）　伊奈半兵衛（尉）
乙黑彌三（郎）　内藤又八（七）郎　小池十兵衛（尉）　駒井兵部
飯田助左衛門（尉）　高田新七郎　小田切雅樂介　飯沼主（右）馬介（助）
前嶋宮内助　同名與左衛門（尉）　同名織部（正）　若尾藤三（郎）
同名宗三郎　大關五兵衛（尉）　矢（津）野庄右衛門（尉）　小野助太夫
中村清三郎　竹河新三郎　古屋仁（六）兵衛（尉）　同名與十郎〇家忠日記増

補ニハ、白井内三郎、小柳津右衛門尉、飯野助右衛門尉、篠本新九郎ヲ加フ、

山縣衆

長谷部藤六郎　藤木（堂）新兵衛（尉）　天河宮内助（少輔）　三科傳藏（三郎）
飯室八郎兵衛（尉）　欒（樂）袋（原）主（庵之）税介（助）　小澤作（佐）左衛門（尉）　牛込賀介
金丸助右衛門（七郎）　原帶刀　細藏（雅）雅樂助　小林彌右衛門（尉）
（曲）粂嶋彌介　藤田彌三（郎）　今井（村）作兵衛（三郎）　深（須）澤又兵衛（尉）
風間甚八郎　武藤久左衛門（尉）　吉田助三（郎）　岩間作内
武河市兵衛（尉）　保（穂）坂主計（助）　志村清三（郎）　萩原孫兵衛（尉）
小澤彦（喜平次）平　大窪式部（少輔）　三井勘三（郎）　大烏井（居）庄（藤）太郎
廣瀬美濃守　飯室宮内丞（少輔）　花輪又平（三郎）　石原合（郷）右衛門（尉）
石黑將監　横田善太（次）郎　保科喜右衛門（尉）　石原五郎右衛門（尉）
成瀬（島）勘五郎　飯河彦四郎　福嶋十左衛門（尉）　河手又左衛門（尉）
轡石右近介　磯（礒野）佐太夫　内藤主膳（正）　永井傳内
窪田又右衛門（尉）　打（折）井市之丞　北村源右衛門（尉）　同名八左衛門（尉）
横井（村）彌兵衛（尉）　飯間藤太郎　長坂重左衛門（尉）　上野（村）右近介（丞）

齋藤修理亮　本口源三(郎)　廣瀬市右衛門(尉)　秋山權之助○家忠日記增
補ニハ、長谷部藤六郎、轡石右近介、飯間藤太郎ヲ闕キ、中込又兵衛尉ヲ加フ、

駒井昌直同心衆

　駒井右京進(昌直)同心衆
古屋八兵衛(尉)　窪田平左衛門(尉)　岡民部介　常田治左衛門(尉)
竹(井)田織部(正)　樋(田)口五郎右衛門(尉)　岡宮內介　窪田作右衛門(尉)
沼田勘七郎　中嶋助三(勘三郎)　金竹(住惣)宗右衛門(尉)　西川新兵衛(尉)○家忠日記增
補ニハ、岡民部介、岡宮內介、沼田勘七郎ヲ闕キ、澁江藤七郎、古屋民部太輔ヲ加フ、

城昌茂同心衆

　城織部(昌茂)同心衆
細野彌右衛門(尉)　金尾靱負(助)　高砂太十郎　內田駒之助
小池監物　小倉清十(三)郎　窪田與太夫　萩原治部左衛門(治左衛門尉)
同名彌兵衛(尉)　大村次左衛門(尉)　鶴田次左(右)衛門(尉)　小澤源兵衛(尉)
安達(藤)佐左衛門(尉)　伴惣介　入戸野四方介(之)　太(多)田九右衛門(尉)
下條久介(助)　青(松)原權兵衛(尉)　中澤(波)儀之丞(之助)　同名宗介
西河金平　中山佐平(次)　原田五右衛門(尉)　鹽(塚)田善內
杉長太(次)郎　大窪勘介(五助)　岩間江(鄕)右衛門(尉)　鵜(烏)野傳之丞

土屋衆

平井重左衛門(尉)　古屋小兵衛(尉)　鈴木孫次郎　石原角之丞(兵衛尉)
牛込彥(喜)兵衛(尉)　雨宮七左衛門(尉)　日貝善五郎　町田縫殿介(助)
今(金)西甚九郎　尾崎彥八郎　清水樂部介　竹內佐(作)右衛門(尉)
駒澤宮內右衛門(五郎左衛門尉)　來(佃宮)間甚六郎　小林加兵衛(尉)　木村仁兵衛(尉)
萩原久右衛門(尉)　檜原仁右衛門(尉)　春日四郎兵衛(尉)　山下新三郎
大橋八兵衛(尉)○家忠日記增補ニハ、內田駒之助、西河金平、清水樂部介ヲ闕ク、
　井伊兵部少輔前土屋衆
梶原肥後守　飯嶋宮內介(太輔)　早川半兵衛(尉)　三(上)澤美濃守
細野豐後守　代繼式部助　横屋市右(左)衛門(尉)　向山佐渡守
落合將監　丸山半右衛門(尉)　渡部(邊)右馬助　田中源左衛門(尉)
後藤久左衛門(尉)　高塚七郎太夫(兵衛尉)　川村(野)作右衛門(尉)　四宮彥(藤)右衛門(尉)
水口平太(夫)　原田又右衛門(右衛門尉)　田村介(助)三(郎)　根津(禰)小兵衛(尉)
鸐田內匠助　細野藤右衛門(尉)　中村平右衛門(尉)　古屋與兵衛(尉)
飯嶋(野瀨)半右衛門(尉)　一瀨平三(郎)　小金(倉)久五(四)郎　相良左近介(左近)
周善寺丹後守　矢崎(小島)又右衛門(尉)　神山宗七郎(惣太夫)　清水惣兵衛(ノ七郎)

神戸忠右(左)衛門(門) 野田助八郎(三) 渡邊新七郎 向山久兵衛(尉)
關主水助(正) 渡邊靱負 脇又十郎(二) 土屋次郎右衛門(尉)
早川彌三右(左)衛門(尉) 中村與兵衛(尉) 後藤彌三右衛門(尉) 矢田儀左衛門(尉)
小池水右衛門(尉) 小倉源兵衛(尉) 同名彌六郎(縫殿助) 荒川善之丞
青柳源三(郎) 井戸(上)權兵衛(尉) 淺井無右衛門 大塚新之丞
關新兵衛(尉) 横田甚(新)八郎 伴(喜)加右衛門(尉) 川口藤左衛門(尉)
武藤長介(助) 渡部左太夫(郎) 篠(宮本)彌三左衛門(尉) 岩下(本)圖書介(之助)
千野牛之助 柳澤市右衛門(尉) 土橋助太夫 平井十右衛門(尉)
飯塚次右衛門 神尾勘兵衛 金丸四郎兵衛(尉) 古屋新十(七)郎
藥袋主計(九郎衛尉) 渡部清七郎 〇家忠日記增補ニハ、代繼式部助、周善寺丹後守、渡邊新七郎、淺井無右衛門、飯塚次
右衛門、神尾勘兵衛ヲ闕キ、土屋甚五兵衛尉、細野勘三郎ヲ加フ、

今福筑前守同心衆

志村半兵衛(尉) 下新兵衛(尉) 甘利帶刀 志村九兵衛(尉)
篠原藤七郎 小田切平次(郎) 河西又兵衛(尉) 塚原與(次)三右衛門
野呂瀨平作 石原十助 塚(德)本善左(三)衛門(郎) 市川助(新三郎)三

落合九藏(兵衛尉) 奧山作右衛門(尉) 向山市(一)平 土屋新三(太)郎
川西源五郎 三井織部 小田切久七郎 井門藤(彥)市(一)郎
渡部(湯)善參(三郎) 森本作藏 金丸藤藏 川村新三郎〇家忠日記增
補ニハ、三井織部、森本作藏ヲ闕ク、

今福新(昌常)右衛門同心衆

入藏兵部之丞(少輔) 川野又兵衛(尉) 萩原喜兵衛(尉) 樋口又兵衛(尉)
桐(柏)原善(兵)四郎 大村勘介(藤四郎) 田中作兵衛(尉) 中澤新三郎
齋藤喜(彥)兵衛(尉) 田中善五郎 同名藤(勝)左衛門(之丞) 井口(鄉)織部(正)
竹野源之允(丞) 藤卷藤三 志村宗(惣)十郎 同名宗(惣兵衛尉)三
中山(澤)清三郎 同名簡(藤)七郎 內藤宗(惣)兵衛(尉) 靍(鶴)野右馬介(助)
同名戸兵衛(尉) 同名彌三(兵衛尉) 河(沼)上新十郎 野澤宮內丞(少輔)
福澤彌三 永澤才兵衛 小林新三 牛込次右衛門
小林善參 山田次左衛門 齋藤善介(助) 小宮山小兵衛(尉)
田中藤右衛門(尉) 作(佐)熊甚右衛門(尉) 同名與三兵衛(尉) 矢崎(島)清五郎
名取善次郎 同名彌左衛門(尉) 石原善兵衛(尉) 深登善介

三井與三兵衛(尉)　田中太門(多門之助)　小野市之丞　谷(善)尾清左衛門(七郎)
三科清五郎　中澤角右衛門(尉)　鹽入藤兵衛(尉)　横林(森兵)六左衛門(尉)　○家忠日記増補ニハ、藤巻藤三、福澤彌三、永澤才兵衛、小林新三、牛込次右衛門、小林善参、山田次左衛門、深澤登善介ヲ闕キ、藤堂藤兵衛尉ヲ加フ、

青沼助兵衛同心衆

志村久右衛門(尉)　渡邊彥次郎(藤三)　錦井與三右衛門　牛込勘之丞(藤)
萩原次右衛門　阿(安)部七郎兵衛(尉)　矢崎長介(助)　横田(內)民部右衛門(尉)
坂本清三郎　飯田民部丞(少輔)　青柳內匠介(助)　角田將監
青沼鄉左衛門(尉)　秋山九右衛門(尉)　横田(內)作之丞　萩原佐(庄)左衛門(尉)
高野(經)簡(藤)四郎　播(總)田簡(藤)十郎　○家忠日記増補ニハ、錦井與三右衛門、萩原次右衛門、角田將監ヲ闕ク、

跡部大炊佐(勝資)同心衆

太田監物　加賀美源次郎　今福右近介(馬助)　與(宗)田三郎(左)右衛門(尉)
石原茂介(助)　雨(當)角勘十郎(七)　古屋作兵衛(尉)　鹽屋市之丞
河野三右衛門(尉)　高室源三(郎)　今福善六郎　御手洗甚八郎(新右衛門尉)
横井彥八郎　飯野(田)雅樂介(之助)　河西善十郎　山下彌右衛門(尉)
跡(阿)部又六郎　野呂瀨右近丞(大夫)

跡部九郎右衛門(昌忠)同心衆

萩野宮內介(助)　播(橋)田又左衛門(尉)　塚越彌三(郎)　井口與三兵衛(兵衛尉)
加賀美六左衛門(尉)　竹(折井)居織部介(助)　長坂右近助　村松勘五郎
岩下市右(左)衛門(尉)　中嶋左近介(大夫)　同名宮內介(助)　飯室次郎兵衛(尉)
入藏角左衛門(尉)　堀(野)內善之丞　保坂清九郎　遠藤四郎兵衛(尉)
石原次(二)郎三郎　若尾兵部介(助)　深澤清三郎　古屋宗左衛門(尉)
清水又兵衛(尉)　同名四郎兵衛(庄右衛門尉)　市川清兵衛(尉)

曾根(世昌)下(野)總守同心衆

矢野淡路守　森主水介(正)　同名源右衛門(之丞)　飯嶋傳三(郎)
野澤半左衛門(尉)　竹內　小崎(島)　横村(井)
矢崎　野口　小(北)川　白井
奥山善(曾)三郎　小深(濱)宮內之丞(少輔)　石原日向守　藥袋帶刀
播(橋)田孫兵衛(尉)　奥山織部(正)　田草河藤太郎　內田
服部　鶴田簡(曾)七郎　前嶋(源次郎)　三井次郎三郎
楠木織部介(正)　横林(小)　山下(三右衛門尉)　太多木佐吉(好)

原貞胤同心衆

渡部又左衛門(尉)　雨宮善(藤)九郎　古屋助兵衛(左衛門尉)　高野外記
二橋三郎四郎　岩間杢左衛門(尉)〇家忠日記増補ニハ、矢野淡路守、矢崎、田草河藤太郎、内田、服部、二橋三郎四郎ヲ闕キ、小宮山淡路守、古屋宮内少輔、鷹野傳左衛門尉、樋羽三藏、石橋忠左衛門尉ヲ加フ、

原隼人(貞胤)同心衆

根津宮内之丞(少輔)　落合宗(惣)兵衛(尉)　柏原平兵衛(尉)　古屋織部介(正)
川野靫負(助)　平尾三右衛門(尉)　飯嶋作兵衛(三郎)　鷹野清四郎
金丸善次郎　清水主殿介　小池又右衛門(尉)　土屋内匠介
多澤茂右衛門(尉)　市川四郎右衛門(尉)　切部助七郎　篠本彌介(助)
(東)本條角右衛門(尉)　川西甚五兵衛(尉)　依田代　佐野代
向山又八郎　細野彌左衛門(尉)　市瀬傳右衛門(尉)　小田切次太夫
川野内記　小倉將監　清水庄五郎　丸田甚四郎
岡角三(郎)　塚原新四郎　山寺(本)源三(郎)　切部治部左衛門(次右衛門尉)
前嶋半兵衛(尉)　平林作三(兵衛尉)　飯田市太夫(右衛門尉)　角田主計(助)
初鹿野金太夫(兵衛尉)　石田左(作)太夫　岩下宗太夫　(今)金井清十郎
(須)深田彌次右衛門(尉)　川西與太郎　三井平次郎　東條民部之丞(少輔)

甘利同心衆

饗庭民部太夫(右衛門尉)　關口宗(惣)十郎〇家忠日記増補ニハ、鷹野清四郎、土屋内匠介、依田代、佐野代ヲ闕キ、古屋助之進、内田市之丞ヲ加フ、

甘利同心衆

經嶋平五郎　竹川監物　田部新兵衛(尉)　太田兵衛次郎(平左衛門尉)
大村新八郎　丸山次兵衛(尉)　朝比奈權右衛門(尉)　飯嶋半右衛門
辻次郎兵衛(尉)　(釜)谷場彌八郎　五味四郎右衛門(尉)　羽中田庄五郎(四郎右衛門尉)
松山　森出雲守　三井(村)清右衛門(尉)　小林内藏(助)〇家忠日記増補ニハ、經嶋平五郎、大村新八郎、飯嶋半右衛門、松山ヲ闕ク、

三枝昌吉同心衆

三枝平右衛門(昌吉)同心衆

初鹿野庄左衛門(右)(尉)　今井兵部介(少輔)　細野佐渡守　同名作之丞
(折)今井民部之丞(少輔)　小林主膳介(税助)　小田切主税介(助)　(須)深田民部太夫
末木宮内之丞(太輔)　(安)阿部式部丞(少輔)　太田宮内之丞(少輔)　(深)須藤兵部之介(太輔)
深海民部之助(太輔)　鮎澤織部丞(正)　若槻主計(助)　塚本喜兵衛(尉)
川口彦三(郎)　鮎澤居(善)右衛門(尉)　小林專右衛門　山下彌兵衛(尉)
河野又市郎　(桐)鹽原市之丞　河野好右衛門(尉)　(任)仕連木郷左衛門(尉)

村松（喜）彦太夫　雨宮源之丞　花岡（藤）簡兵衛（尉）　飯田（延）神五右衛門（尉）
飯嶋（邊）作右衛門（尉）　高野淸七郎　中山久右衛門（尉）　阿（安）部宗十郎
山村彦兵衛（尉）　細野源五右衛門（尉）　小池四郎兵（兵衛尉）衛　市瀨（五）彌左衛門（尉）
（加加爪）加賀美右衛門丞（尉）　岩下鄉左衛門（尉）　若槻次郎左衛門（尉）　樋口三郎（右）左衛門（尉）
小宮山（鄕）八左衛門（尉）　渡部半左衛門（尉）○家忠日記增補ニハ、細野佐渡守、同名作之丞、小林專右衛門ヲ闕ク、

寄合衆

大志万與次郎　川（荏）野市介（助）　半利兵部（六之助）介　大窪宗次郎（惣右衛門尉）
長谷部宗（與惣右衛門尉）太夫　今井主計（助）　靑沼與兵衛（尉）　川合作兵衛（尉）
塚田內藏介（助）　岡村吉右衛門　五味源次（兵衛尉）　（鹽見屋）鹽屋久右（兵衛尉）衛門
萩原市之丞　岩下七郎左衛門（尉）　周善寺六右衛門　惣田七兵衛（尉）○家忠日記增補ニハ、岡村吉右衛門、周善寺六右衛門ヲ闕キ、中澤市左衛門尉、志村善右衛門尉、市川新右衛門尉ヲ加フ、

御藏前衆

雨宮次郎右衛門　石原新左衛門　小宮山民部之丞　鷹野喜兵衛
原田織部介　山下內記介　小宮山源之丞　窪田源五郎
諸星簡　丸山簡七郎　中川雅樂介○家忠日記增補ニハ、コノ御藏前衆ヲ闕ク、

貳拾人衆

三（澤）深四郎兵衛（尉）　雨（南）宮彦（庄）左衛門（尉）　鮎河甚五兵衛（尉）　野呂瀨彦（庄之）助
小池主計（助）　切（杉）田新（次）左衛門（尉）　河西喜兵衛（尉）　小（南）田切源太（右衛門尉）
竹井傳兵衛　窪田平太（右衛門尉）　嶋田外記　奥山與右衛門
甘河兵部之介（少輔）　宮澤善兵衛（尉）　岩下又左衛門（尉）　三澤佐（右衛門尉）門○家忠日記增補ニハ、竹井傳兵衛、奥山與右衛門ヲ闕ク、

人數合八百九拾五人○武田親族衆以下交名ノ傍註ハ、家忠日記增補ニ據ル、

〔寬政重修諸家譜〕千三百七十五　河野通重（但馬守、）　代々伊豫國に住し、通重がとき甲斐國にいたり、武田家につかへ、天正十年、勝頼没落のゝち、駿府にをいて、めされて東照宮にまみえたてまつり、仰によりて先方を支配す、八月十日、武田家にて支配せし同心四十五人の分、先蹤のごとく還補せしむ、もし難澁の輩あらば、披露のうへ下知を加ふへし、かつ給分、陣扶持、夫丸、屋敷、名田、被官人及ひ諸役免許等のこと、舊來のごとく相違あるへからず、この旨を存し奉公怠へからざるむね、成瀨吉右衛門正一、日下部兵右衛門定好うけたまはりてこれ御朱印を下さる、○朱印狀ハ、八月七日ノ條ニ見ユ、十二月十二日、甲斐

通重等秋葉山ニテ起請ス

飯室昌喜

米倉忠繼

忠繼家康ノ命ニ依リ桐山ニ隱ル

國万力、市部、八代、竹居、河原部、飯田、河原、小石和等にをいて、本領百七十七貫三百文の地を宛行るゝの御朱印を下さる、この月遠江國秋葉寺にをいて、同僚志村又左衛門貞盈等九人とともに、一紙の起請文をたてまつる、成瀬正一、日下部定好これを奉行す、これより御長柄のものを支配す、○下略

〔寛政重修諸家譜〕二百二十六　飯室昌喜庄左衛門、　勝頼につかへ、天正十年、武田家沒落ののち、諸士とおなしく秋葉山にをいて誓詞を東照宮に奉てまつり、八月二十七日、舊領甲斐國飯室、淺利、山口、鼻輪等のうちにをいて、六十七貫五百文の地をたまひ、御朱印を下さる、このとし同國都留郡大竹の郷にをいて戰ひ、諸手に先立ち、首一級を得てたてまつりしかは、十月十五日、その功を賞せらるゝのむね、高木九助廣正より書狀を送る、○下略

〔寛永諸家系圖傳〕三十四　米倉忠繼主計助、　天正十年三月、勝頼生害し、甲州沒落のとき、信長すなはち令をくだし、甲州浪人をめしかゝゆる事禁制のよし申ふるゝにより、ひそかに東照大權現、成瀬吉右衛門に命じて、甲州市川におゐて、忠繼をめし出され、遠州桐山へまいり、しのびてはかりあるべきよし鈞命をかうぶる、すなはち彼地におもむく、同年六月、信長自殺しときに、北條氏直甲州をおさふるにより、大權現、忠繼を桐山よりめされて仰らるは、甲州へおもむき、計策をめぐらすべきよし命をかうぶり、甲州に發向し、武川の兵ども御旗下に屬し、御進發已前、御先手へ人數を指こし、氏直が士卒小沼にたてこもりしを追散し、戰功をぬきんづるゆへ、御直判の御書を下さる、

於其郡、別而被走廻之由、祝著候、各有相談、彌可被抽忠信候、恐々謹言、

七月十五日　家康御判

米倉主計助殿

折井市左衛門殿○下略、寛政重修諸家譜米倉忠繼譜、コノ次ニ、二十四日、樫山御著陣のとき、次昌と共に、武川の者を進退すへき旨、仰をかうふるトアリ、譜牒餘錄後編米倉助右衛門書上異事ナシ、

折井次昌

〔寛永諸家系圖傳〕四十三　折井次昌市左衛門尉、淡路守、　天正十年、織田信長甲州に進發して、勝頼自殺以後、東照大權現甲州市川に御坐のとき、成瀬吉右衛門尉奏者にて、大權現を拜したてまつり、鈞命によりて、妻子をたつさへ、遠州桐山におもむく、時に御扶持かたをたまふ、同年六月、信長薨去の後、北條氏直甲州へ進發す、このとき大權現先かけの兵をつかはさるときは、時に次昌を甲

武川衆家康ニ屬ス

州におもむかしめ、次昌が一族、そのほか先方の輩御旗本に屬せしむべきむね鈞命をかうぶりて、次昌はかりことをめぐらし、こゝろさしをむけますほどに、武川の士卒こと／＼く御旗本に屬す、それより北條に屬せし小沼の小屋をうちやぶりて、上聞に達す、御感なのめならず、いよ／＼忠節いさをしあるべきむね、大權現御直判の御書をたまふ、其の詞にいはく、○中略、七月十五日附、米倉忠繼、折井次昌宛、家康書狀ニカヽル、前掲米倉忠繼傳ニ收ムルモノニ同ジ、其後新府に渡御ありて、御對陣の時、次昌勳功をはげます、是によりて、北條氏直より、計策の狀を通ずるもの二人あり、武川の諸士とあひはかりて、これをうちとる、大權現これを感したまひ、又御書を下されて、本領の地數ケ所を給はり、其上步卒五十人をあづけらる、○上下略、寬政重修諸家譜折井次昌譜、米倉忠繼譜ト同ジク、二十四日、家康ヨリ武川ノ者ヲ指揮スベキ命ヲ蒙ルコトヲ記セリ、譜牒餘錄後編折井市郎兵衛書上異事ナシ、

〔譜牒餘錄後編〕三十一 小普請之六 折井市左衛門

御當家え先祖被召出候筋目之覺

先祖折井市左衛門 本國甲斐、生國甲斐、

武田信玄、同勝賴迄奉公相勤、天正十壬午年三月、信長公甲斐國發向之刻、勝賴生害以後、甲州浪人抱置候儀、堅法度之旨、信長公被仰出候得共、權現樣御

氏直武川衆ヲ招ク

忠繼次昌武川衆ノ誓紙ヲ徴ス

隱密ニ而、成瀨吉右衛門を以、甲州於市川、米倉主計、折井市左衛門兩人被召出、御目見仕候得者、遠州桐山え參忍可罷在旨、御直々上意を以、彼地え參罷在候、同年六月、信長公生害之刻、權現樣爲御迎、三河路迄、主計、市左衛門罷出御目見仕候處ニ、早々甲州え參、計策可仕旨、御直々被仰付、彼地え罷越、武川之者共御手ニ付ケ候、然ル處ニ、北條氏直より計策之者、中澤縫殿右衛門、同新兵衛兩人被差越候間、武川之者共致一同、兩人共に討取、其謀書共ニ差上申候、且又武川之者共別心無之段、天罰起請文、主計、市左衛門宛所ニ而數通取置、一筋ニ何爲御忠節申上候、右起請文于今至て、拙者方所持仕候、御出馬已前御先手勢被差遣候時分、北條方ニ罷成候者共籠居候小沼と申所之小屋迄追落、其上於諏訪表走廻仕、御忠節申上ニ付、御直御判之御書兩人度々頂戴仕候、天正十年八月十七日、御知行御書出御朱印、可抽軍忠由之御文言ニ而頂戴仕、○朱印狀ハ八月七日ノ條ニ收ム、同年十二月七日、御直御判之御書出、可抽戰忠之御文言ニ而頂戴仕、翌年四月廿六日、嫡子九郎次郎を、御書出之御朱印頂戴仕候、

〔譜牒餘錄後編〕二十六 小普請之一 青木平助

小沼小屋
氏直重テ武川衆ヲ招ク
入戸野門宗

覺

權現様ハ私大曾祖父靑木尾張被召出候筋目、天正十年壬午ノ三月、信長公甲斐國發向、武田勝頼生害以後、同年六月、信長公御生害之刻、權現様甲斐國ハ御先手勢被指遣候節、武川之者共可被召出旨依上意、則御先手勢ト申合時節、北條氏直甲州若神子表へ出張有之而、武川筋信濃境、殊依爲新府城下之地、氏直より、武川之者共、可令味方之旨、計策雖及度々、不致承引候、北條方ニ罷成候者共引籠候信濃境、小沼小屋、武川之者共追落走廻仕候、權現様新府御著座之砌、武川之者共、一同ニ御目見仕、北條ト御對陣、重而氏直より武川之者共引付ル計策之狀、取次之侍中澤縫殿右衞門、同名新兵衞兩人、武川之者共以相談討捕、其狀共ニ新府へ差上、一筋ニ御忠節申上ル付(ニ脱カ)、本領地致拜領、御朱印頂戴仕、知行所ニ被爲召置候、〇下略

〔寛永諸家系圖傳〕三十六

入戸野門宗又兵衞、甲州沒落以後、北條氏直甲州へ發向のとき、東照大權現御出馬ありしに、かねて御先手をはらいさるゝ時、小沼小屋北條に屬せしを、門宗武川衆と同しく是をせめやぶりて、首級を得たり、其後氏直謀書を味方の中へをくる、門宗又武川衆と相談しくゝり

山寺信昌
山高信直

乃使者兩人をうちとれ、こをによつて、本領の地を給れる、〇上下略

山寺信昌甚左衞門、同十年、勝頼自害の後、信昌めされて、東照大權現を拜謁し奉る、北條氏直と甲州新府にて對陣の時、武川は信州境なるに依て、氏直さま〳〵計策をめぐらし、武川衆をまねくといへとも、武川の諸士是に應せつ(ず)して、みな同意に大權現に屬し奉る、此忠志によりて、御朱印を給はり、本領の地を領す、〇上下略

山高信直宮内、大權現泉州堺より三州に還御有て、折井、米倉を召て仰ゝるは、汝等兩人、とゝく甲州に歸て、同志のものをあつめて、御馬の甲州に入を待べし、兩人則馳かへつて、武川の諸士と相ともに先陣に列す、此時北條氏直若神子に發向し、武川は信州の境なるに依て、計策をめくらし、武川の諸士をまねくといへとも、是に應せす、みな志をあはせて、大權現に屬し奉る、北條が徒黨小沼小屋のものをせめうつ、大權現新府に入御の時、武川の諸士同時に拜謁す、其後氏直と御對陣のあひた、北條が廻文をもてる使者

なり、武川の諸士件の使者を討取、その廻文をうばひて、大權現に獻しければ、御感有て、本領安堵の御朱印をたまふ、此ときに逸見日野臺花水の坂の邊へ、敵兵ひそかにうかゞひきたれば、信直是を察して、柳澤兵部と相はかつて、兵を三吹臺にふせて、敵のきたるを待て是をうちとり、首級二ツ、生捕一人を得て新府に獻す、時に大權現御褒美をたまふ、〇下略

信直三吹臺ニ氏直ノ兵ト戰フ

〔譜牒餘錄後編〕二十六 小普請之一 山高宇右衛門

覺

一 〇中略 權現樣新府へ御著座之砌、武川之者共御目見仕候、北條御對陣之內、重而從氏直、武川之者共引付計策之狀取次之侍、中澤縫殿右衛門、同新兵衛、此兩人を各以相談討捕之、其狀共ニ新府へ差上申候、逸見筋日野村之臺、從花水之坂、武川之川路へ、敵及度々忍來ニ付而、山高宮內、柳澤兵部與致相談、小屋ニ籠居候雜人共迄召連、爰かしこに伏、三吹之臺に人數を隱置、相待時節、敵忍來候を追拂、首二討捕、幷家來之者共生捕壹人仕、新府に指上申ニ付而、爲御褒美、靑銅三貫文宛、家來之者共に被下置候、〇下略

柳澤信俊

〔寬政重修諸家譜〕百六十三 柳澤信俊 兵部丞、(天正)十年、勝賴沒落の後、武川の諸士とおなじく、東照宮の御麾下に屬し、忠節をむねとす、このころ北條氏直使をつかはし、武川の士を味方に招んとするのとき、信俊、米倉主計助忠繼、折井市左衛門次昌等に力を合せ、氏直の使をうちとりて首を獻し、はた氏直に屬せし小沼の小屋を攻やぶる、そのとし甲斐國新府に渡御あるのとき、はじめて拜謁す、このころ北條勢、逸見日野村の花水坂にたむろして、しきりに武川を襲ふ、信俊、山高宮內少輔信直とはかりて、三伏(吹)の臺に伏兵を設けてこれを追崩し、首二級を討とり、家臣も敵一人を生捕、新府の御陣に獻せしかば、功ありとし家臣に青銅三貫文をたまふ、八月十六日、本領甲斐國柳澤の鄉にをいて、七十二貫八百文の地をたまひ、十二月七日、御朱印を下さる、〇上下略、寬永諸家系圖傳柳澤信俊傳異事ナシ、

多田昌綱

〔寬永諸家系圖傳〕二十四 多田昌綱 三八郞、 天正十年、北條氏直甲州をおそふとき、大權現御進發なさるゝ、御先手へ人數つかはさるゝ時、武川の者どもと同じく忠節をつくし、北條の兵どもの備へたる小沼の小屋を追落す、時に大權現新府おもてへ御著座の時めし出され、新府おもてにたびたび高名あり、時に昌綱十六歲、〇上下略

伊藤重次

武川衆氏直ニ屬ス後家康ニ屬ス

重次中澤縫殿右衛門ヲ討ツ

〔寛永諸家系圖傳〕八十六 伊藤重次三右衛門尉、同(天正)十年、甲州落居のゝち、東照大權現に拜謁したてまつる、同年、北條氏直甲州に進發す、これによつて大權現御出馬にさきだつて、先手に軍兵をさしむけたまふ、重次らは隨一にして、軍功をはげまし、この時小沼小屋、武川等の諸士、北條に屬すといへども、重次これを追てあひたゝかふ、こゝにをひて、武川の諸士、大權現の麾下に屬したてまつる、同年、大權現新府に渡御したまふ時、米倉佐(左下同ジ)大夫、同彦大夫と一所にをひて、首級を得て疵をかうふる、大權現これをきこしめされ、稱美したまふ、しかのみならず、北條が所よりはかりことをめくらし、氏直に屬せよといふ狀をとり傳るもの二人なるを、佐大夫ならびに重次、彼二人をうちとる、これによつて、本領をくだしたまはる、○上下略

〔譜牒餘錄後編〕二十九 小普請之四 伊藤三右衛門

權現樣へ先祖御奉公仕候筋目

一北條氏直ゟ計策狀取次申侍、武田勝賴家來筋中澤縫殿右衛門、同新兵衛と申者兩人御座候、兄縫殿右衛門ハ曾祖父伊藤三右衛門討、

曲淵吉景

吉景桐山ニ隱ル

折井次正

一北條方ニ而信州境小沼と申所ニ楯籠申候者共、武川中ニ而責落、御忠節申上候、右二ヶ條委細折井市郎兵衛方ゟ書上申候、

一甲斐國新府ニ御著座之砌、米倉左大夫、同彦大夫、曾祖父伊藤三右衛門手負高名仕候時、三人之者共ハ御卷物、時服等爲御褒美被下置候、

〔寛政重修諸家譜〕百七十九 曲淵吉景勝左衛門、武田信虎より信玄勝賴につかふ、甲斐國武川谷に住し、天正十年三月、勝賴沒落のゝち、剃髮して玄長と號す、さきに織田右府より、武田家の士を扶助することを禁ぜらるゝといへども、東照宮ひそかに武川の者どもに月俸をたまひ、遠江國桐山の邊に居しめらる、吉景もその列にあり、六月、右府うせたまふののち、北條氏政、氏直等計策を設て、武川のものを味方に招くといへども、みなこれに應ぜず、七月、東照宮甲斐國に御發向のとき、御麾下に列し、武川のものと共に御先手に加はり、信濃國の境小沼の小屋をせめ破る、やがて新府に御著陣のとき、吉景、正吉父子ともに拜謁し、本領をたまふ、○下略、寛永諸家系圖傳曲淵吉景傳異事ナシ、

〔寛政重修諸家譜〕百六十六 折井次正長次郞、武田信玄、勝賴につかふ、天正十年三月、勝賴生害の後處士となり、六月、折居市左衛門次昌、米倉主計助忠繼

馬場信成

曾雌定政

の申旨に志たがひ、武川の士悉く東照宮の御麾下に屬す、次正もその列にあり、後同志の輩と共に信濃國小沼の小屋を攻落し、七月二十四日、甲斐國樫山に御著陣のとき、はしめてまみえたてまつる、のち新府にをいて、北條氏直と御對陣なり、氏直、中澤縫殿右衛門某、同新兵衛某をして、計策の書を贈るの所、同志の者と共にかの二人を討取、其謀書を添て御陣營に獻せしかは、御感をかうぶり、後逸見乃出張、花水坂等におゐて忠節を顯す、十二月七日、甲斐國井上、押越、河原、龜澤、鎮目等にをいて三十貫文の采地をたまひ、御朱印を下さる、○下略、寛永諸家系圖傳、折井次正傳異事ナシ、

〔寛政重修諸家譜〕百八十四

馬場信成右衛門尉、武田勝頼につかふ、根小屋城に住す、天正十年勝頼没落ののち、東照宮甲斐國にいらせたまふれ時、武川れ諸士とともに御麾下に屬し、北條氏直若神子に出張するのとき、相謀て小沼れ小屋を攻おとし、のち新府に渡御ありて、北條家と御對陣乃とき、志は〳〵軍忠を勵ましにより、諸士とおなしく本領れ地をたまひ、○下略、寛永諸家系圖傳馬場信成傳異事ナシ、

〔寛政重修諸家譜〕二百二十九

曾雌定政民部、信玄をよび勝頼につかへ、天

家康知久頼氏ノ本領ヲ安堵ス

頼氏家康ニ伊賀路ニ從フ

頼氏酒井忠次ノ組子トナル

正十年、勝頼没落乃のち、東照宮甲斐國に入せたまふ乃とき、武川乃諸士とゝもに御麾下に屬し、北條氏直若神子に出張し、武川の士を招くといへとも、これに從はす、かへつて北條に屬せし小沼の小屋を攻落す、後新府に渡御ありて、氏直と御對陣乃とき、志ば〳〵軍功ありしにより、諸士とおなしく本領の地を賜ふ、○下略、寛永諸家系圖傳曾雌定政傳異事ナシ、

〔知久文書〕○信濃

知久本領之事、如前々、不可有相違者、彌可被存忠信者也、仍如件、

天正拾年壬午

七月廿六日　家康（花押）

知久七郎殿

○本記録御用所本古文書、但知久領村數都合六拾九村トアリ、

〔寛永諸家系圖傳〕四十六

知久頼氏式部少輔、天正十年、東照大權現御在京の砌はしめて拜謁す、信長生害の後、大權現伊賀路より濱松へ御歸國の時供奉す、同年七月、信州伊奈の郡本領ことふより、知行せしむべきの旨、御直判を頂戴す、大權現御出陣の時、父頼元と相ともに甲府にいたり、酒井左衛門尉忠次くみ子として甲府御嵩の御番をつとむ、其後小田原氏直か士卒、若御

子ようち出ゐ時、忠次と心救ゐ乞紡、御嵩れ御番救かさくまをる、翌年信州佐久の郡前山、岩尾の城兩所におゐく一戰救とけ、士卒手負あまさなり、蘆田修理大夫家中の勇士同し軍忠ゐり、

〔寛政重修諸家譜〕三百四十六　知久頼氏式部少輔、天正十年、京師よをいくむしめて東照宮ふ拜謁し、六月、織田右府事ゐるれゝち、伊賀路より濱松まて扈從したてゐ川る、七月十日、甲府よ著御あり、そこやうふ諏訪表ふ御馬をそゝめらるゝよより、頼氏を、同國の輩を催しゐ、彼地ふそせまいるへきむゑ御書を下さ紅、二十六日、信濃國伊奈郡知久の本領六十九村安堵乃御判物をたまふ、○下略

〔知久記〕一天正十歳、徳川家康公於洛被爲御駕を留の砌、頼氏四拾二歳ニ而、初而遂御目見を、此年爲明知(智)生害有故、家康公泉州堺ゟ伊賀路を經、濱松ゐ御下國有、頼氏堅固よ奉供奉、同年七月、信州伊奈郡の本領六千貫安堵之旨頂戴、同年家康公甲府ゐ御著、翌年、頼氏方ゐ御書を被成、其ニ曰、近日諏訪表ゐ可爲御馬ヲ立候條、其許有り合候衆相催し、彼地へ可押出由被仰付、頼氏伊奈衆を悉ク相催し、不移時日を甲府へ參陣ス、夫とり諏訪表ゐ供奉し、知久諏訪御味方仕、信劢ゐ初而被入御馬を候由、

〔譜牒餘錄後編〕十七御小姓組津金右衞門七
今度遂忠節、妻子以下此方可被引越候旨、甚以神妙之至也、爲其賞知行百貫文、現米百俵可出置者也、仍如件、
天正拾壬午年
七月九日（御朱印）
津金修理亮殿(胤久)
小尾監物丞殿(祐光)

家康津金胤久小尾祐光ノ忠節ヲ賞ス

〔寛永諸家系圖傳〕三十五　津金胤久修理亮、○小尾祐光ノ弟、　信玄、勝頼よ茫ゐふ、父胤時と信玄れ使としく、玄む〳〵小幡よいさる、勝頼自殺の時、胤久美濃土佐の城よゐりく番救茫とむ、其後大權現よ茫うへ奉る、甲州信州の所々、ならひふ小田原九部郡等ふおゐく、兄祐光ら同しく軍功ゐる事、兄小尾監物祐光譜中ふ見へさり、○下略、寛政重修諸家譜津金胤久譜、家康ヨリ采地粮米ヲ賜ハルコトヲ記ス、前掲譜牒餘錄後編津金右衞門七書上ニ異ル事ナシ、

祐光家康ニ屬ス

小尾祐光小尾監物、甲州落居の後、津金の郷は、信州の境なるにより、北條氏直もありことを以て、これ〳〵まきくといへとも、祐光ならひに津金修理胤久これをよくみせをして、阿部善九郎を奏者として、祐光、胤久二人妻子を人質に獻して、東照大權現の幕下に屬す、大權現人質の御扶持として、駿州曲金長崎ノ兩所におゐて、領地〇寬政重修諸家譜、小尾祐光譜百貫文トアリ、ならひに兵粮〇寬政重修諸家譜小尾祐光譜、百俵トアリ、を給はる、同十年七月九日、御朱印を頂戴し、いまに所持す、〇上下略

〔譜牒餘錄後編〕十一諸旗本之五小尾十郎左衛門 拙者曾祖父小尾監物、〇中略天正拾年、權現樣甲斐國御出馬之節、北條氏直發向之刻、御先手御案内申上候而、ゑくさふこやの者共討取、新府江印指上申与度々御忠節申上、上意ニ而本領地幷御加增拜領、〇下略

初鹿野昌久

〔寬政重修諸家譜〕九百八十七 初鹿野昌久傳右衛門、今の呈譜信昌に作る、 十年、武田家沒落の後、七月二十四日めされて東照宮まつりへまてまつり、質として妻子を駿河國にさてまつりしかは、八月七日五十貫文の地をさまひ、〇コノ書狀、八月七日ノ條ニ見ユ、二十七日また甲斐國の本領山梨、巨摩二郡のうちにおゐて、二百七十貫文餘の地を賜はり、各御朱印を下さる、〇コノ朱印狀、八月七日ノ條ニ見ユ、

〔熊谷文書〕〇播磨

今度依被抽忠信、於河加藤跡職、被宦共永出置之候、彌以於被勵忠勤者、重而新知可充行者也、仍如件、

天正十壬午年

七月廿日　（家康）朱印〇印文福德

小菅次郎三郎殿

今度依忠信爲其賞、かぬ川七十貫、小曾四百貫、都合四百七十貫文、永出置之候、彌被盡粉骨者、重而新知可宛行者也、仍如件、

天正十年壬午

七月廿日　（家康）朱印〇印文福德

小菅（菅）又八殿

〔寬政重修諸家譜〕二百十二三 小菅正吉八左衛門、今の呈譜正利に作る、

小菅正吉
同正成

正成伊右衞門、四獄、今の呈譜四獄助正盛に作れ、

正吉 武田信玄をよひ勝頼にしたがふ、天正十年、勝頼沒落のゝち、東照宮甲斐國にいらせたまふのとき、めされて拜謁し、御麾下に列す、

正成 天正十年、父とゝもに東照宮につかへたてまつる、この年北條の兵黑駒に出張せしとき、鳥居彥右衞門元忠に屬し、敵の首二級を得たり、

〇上下略

窪田忠廉
同忠知

〔寛政重修諸家譜〕千三百八十 窪田

忠廉監物、越後、
忠知右衞門、右近、助十郎、庄兵衞、母は某氏、

忠廉 武田信玄、勝頼につかふ、鎗の者を支配す、天正十年、勝頼沒落のゝち、男忠知とおなしく、駿府に於いて、はじめて東照宮にまみえたてまつり、則御麾下に屬し、九月朔日、武田家にて支配せしところの同心をあつけらる、もとのごとく給知をも宛行はるゝのむね、御朱印をくだされ、

忠知 天正十年、父とゝもに駿府にいたりて東照宮に拜謁し、御家人に加へらる、十二月九日、井伊直政うけたまはりて、甲斐國の本領安堵の御朱をたまひ、後父とともに同國に住す、〇下略

中西實清

〔寛永諸家系圖傳〕百二十四 中西實清彥助、生國信濃、 天正十年、東照大權現甲州御入國の時、實清案内者となる、此ゆへに、慶長六年、大久保石見守が奏者よつてめし出され、仰をかうぶり、信州下伊奈の御代官をつとむ、〇下略

大日本史料 第十一編之一終

大日本史料第十一編之一

正誤

頁	行	誤	正
二一三	見出シ	梅雪夫人	梅雪ノ母
二一四	見出シ	梅雪夫人	梅雪ノ母
三三三	一二	小畠	小幡
三六五	四	(頓五郎興元カ)ノ傍註ヲ削ル	
六六一	見出シ	北條輔廣	北條高廣
同	三	北條(輔廣)安藝守	北條(高廣)安藝守
六六二	二	北條(輔廣)	北條(高廣)
同	一一	北條(輔廣)	北條(高廣)
六六三	見出シ	輔廣	高廣
同	一	北條(輔廣)	北條(高廣)
同	六	北條(輔廣)	北條(高廣)

昭和二年三月十三日印刷
昭和二年三月十五日發行

(大日本史料第十一編之一奥付)

豫約價金七圓

著作權所有

編纂兼發行者 東京帝國大學

印刷者 四日市印刷株式會社

發行所 東京帝國大學文學部 史料編纂掛 (電話小石川(85)七〇二番 四〇一二番)

qu'il disoit, que de pauvre bucheron il estoit devenu Monarque. Comme il avoit de la teste & du cœur, on luy conseilla de porter les armes. Il s'enrôla donc sous un Capitaine & dans tous les combats où il se trouva, il se distingua par sa valeur en sorte que Nobunanga en fit estat. Lorsqu'il fut dans le commandement, il fit paroistre autant de conduite qu'il avoit montré de courage : De maniere qu'aprés avoir remporté plusieurs victoires sur les ennemis, Nobunanga le créa son Lieutenant General & luy donna le commandement de toutes ses armées.

Cet homme qui avoit une ambition demesurée, voyant son Maistre mort, & considérant qu'il n'avoit laissé que trois enfans, dont l'aîné qui n'avoit qu'un fils âgé de trois ans avoit esté tué avec luy ; que le cadet estoit imbécille d'esprit ; & que le troisième, quoy que brave, n'avoit ni forces, ni argent, crut qu'il se contenteroit de quelque Gouvernement s'il luy en offroit un, & qu'ainsi il se rendroit maistre de l'Empire. Pour y parvenir il sonde premièrement l'esprit des gens de commandement de son armée, & les voyant tous disposez à luy obéïr comme ils faisoient à Nobunanga, pour couvrir son ambition, il prend la qualité de Tuteur & de Gouverneur du petit Prince héritier de l'Empire, & le met dans une forteresse avec un train convenable à sa naissance. Le troisième fils de Nobunanga sentit incontinent son dessein, & ne pouvant souffrir qu'un Sujet de son père eût le Gouvernement de tous ses Royaumes, se ligue avec quelques Grands Seigneurs ennemis de Faxiba & qui estoient jaloux de sa puissance : mais leur entreprise ne leur réüssit pas ; car Faxiba qui estoit grand Capitaine & qui avoit de bonnes troupes, les défit sans peine & fit mourir tous ceux qui pouvoient s'opposer à ses desseins.

---

disponga quel che sarà di maggior suo seruitio. Che humanamente parlando, se il gouerno viene in mano di Sanxeci, si hà da far molto frutto nella conuersione, poiche si mostraua già tanto grande nostro amico, come più volte si è scritto. Et questi mesi passati pose nella sua cinta alcuni grani benedetti hauuti dal nostro Lorenzo Giaponese; & dimandato come portaua quei grani, non essendo egli Christiano, rispose che lo faceua accioche la cosa venisse alle orecchie di suo padre, il quale si hauesse mostrato di non curarsene, all'hora si trouarebbe libero, & sicuro per battizzarsi qual'hora volesse. Queste, & simli cose passauano quando egli era ancora in più bassa fortuna, prima che gli fossero assegnati da suo padre i Regni sudetti. Hora che si vede già quasi Monarcha, non sappiamo se si leuara (come fece luo padre) in superbia, & facendolo, non gli mancherà il suo gastigo. Et in vero sono stati euidenti i giuditij d'Iddio cerca Nobunanga, poiche tutti i suoi tanto sontuosi edifitij sono venuti ad abbruciarsi tanto disgratiatamente con perdita di tante ricchezze, e tesori inesftimabili, essendo egli stato di natura non solo scarso, ma rapace, di modo che quando sapeua che alcuno hauesse qualche rara cosa, gliela mandaua à chiedere, & non se gli poteua negare: anzi molti facendo di necessità virtù, gliele offeriuano spontaneamente. Et il fratello Vincenzo Giaponese che hauea di ciò molta notitia, mi afferma che due solamente di quelle gioie (molto però differenti dalle noftre di Europa) valeuano più di trentacinque mila scudi. Hora acciò che nè anco di queste restasse nulla, Nobunanga, quando venne questa vltima volta al Meacò, le hauea portate seco quasi tutte, per mostrarle a diuersi Rè, & Signori: doue arsero infieme con lui.

Di questa maniera tanto misera & infelice è venuto à finire chi pensaua che non solamente nel mondo, ma ne anco nel Cielo, fosse il maggior Signore di lui. Et Acheci, come gli era stato compagno nella superbia, cosi fù anco nella sciagura, vcciso per mano di due Contadini, senza pur potersi tagliar la pancia de se medesimo, Cosa, che questa cieca gentilità si recca ad honore.

X.

AVVISI DEL GIAPONE DEGLI ANNI M. D. LXXXII., LXXXIII. ET LXXXIV.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus.
Nagasaki, January 2, 1584.
[*Extract*]

Quanto alle cose del gouerno, & à i tumulti di guerra, dopo la morte di Nobunanga, è rimasto il più potente in quei Regni della Tenza, Faxiba Cicugendono: quello, che à nome di Nobunanga, staua prima facendo guerra col Rè di Amanguci. Questi, per accommodar meglio le cose sue piglio il nipote di Nobunanga, molto fanciullo, & lo pose in Anzucì, con titolo di Monarcha, dandogli per tutore il secondo figlio di Nobunanga, detto Ociaxen Fugendono, Rè di Igè, con grande apparato, ma tutto superficiamlmente: percioche Faxiba gouerna ogni cosa, & fa ciò che vuole, & lo stesso Rè di Igè gli stà soggetto. Dopò questo Faxiba con Xibata, & Icheda, & Niuano Gorozaimon, de' principali di Nobunanga, diuisero i Regni, & l'entrate ad libitum.

XI.

P. CRASSET, HISTOIRE DE L'EGLISE DU JAPON.

Tome. I. Livre. VIII.

Faxiba de vangeur de la mort de Nobunanga, voulant se rendre maistre de son Empire, prit toutes les mesures necessaires pour executer son dessein. C'estoit un homme d'une extraction très basse: car les Histoires du Japon rapportent, qu'il estoit Bucheron de son métier & qu'il alloit dans les forests couper du bois, dont il faisoit deux charges par jour qu'il portoit sur son dos à la Ville pour avoir du pain. Le P. Froez en ses lettres écrites du Japon dit, qu'il racontoit souvent ses avantures &

due, ò tre Baroni assalirono Sanga, promettendo premio à chi portasse loro le teste del Signore di quell' Isola, & del figliuolo amendue Christiani, i quali se n'erano fuggiti di notte con la famiglia, lasciando in abbandono tante donne, & fanciulli. I gentili posero fuoco alla Terra, & benche alcuni Christiani gli pregassero ad hauer rispetto alla nostra Chiesa, tuttauia volsero in ogni modo abbruciarla, essendo la migliore che hauessimo in queste parti da quella del Meacò in poi. Et molti Christiani, che di altre parti si erano là ritirati, come in luogo più sicuro, perderono gran parte delle sue facoltà. Il Signore col figliuolo vanno quà e là nascosti, dureranno fatica à compare. Vna cosa vi è di buono, che quella Terra è stata donato a Giouanni Giuchidono, per la cui virtù, & carità si potranno riunire quei Christiani che saranno restati viui. A Giusto hanno dato l'entrate di Noxinocore vicino à Tacaiama luogo suo proprio, dalle quali cauerà più di ventimilla scudi l'anno.

VIII.

P. CRASSET, HISTOIRE DE L'EGLISE DU JAPON.

TOME. I. LIVRE. VIII.

Aquechi ayant sceu que ces trois armées venoient fondre sur luy, partit en diligence d'Anzuquiama pour se rendre à Meaco. A peine estoit-il sorti, qu'un second fils de Nobunanga qui estoit dedans & qu'on tenoit pour insensé, fit mettre le feu au superbe Palais de Nobunanga & à la Citadelle qu'il avoit fait bastir avec tant de soins & tant de dépenses, de peur que le meurtrier de son père ne s'en prévalût. Il fit aussi brûler la ville d'Anzuquiama qu'on regardoit comme un miracle du monde. Dieu sans doute le permit ainsi pour détruire jusqu'aux fondemens ce théatre d'orgüeil & d'impiété, où l'on venoit de commettre une idolâtrie si abominable.

IX.

AVVISI DEL GIAPONE DEGLI ANNI M. D. LXXXII., LXXXIII. ET LXXXIV.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus.
Kuchinotsu, February 13, 1583.

[*Extract*]

Stauano i nostri in grande affanno per non sapere che cosa fosse del P. Gregorio di Cespedes, il quale in questo tempo era nella Città del Ghifo, ma hieri venne vna lettera sua, nella quale in somma diceua, che quando arriuò la nuoua della morte di Nobunanga, egli non si trouaua nel Ghifo, ma di là sette leghe, in vn luogo chiamata Vogaghi, in casa di vn vecchio per nome Cione, molto buon Christiano, che hauea alleuato vn figliuolo di Nobunanga, & tanto prudente, che tumultuandosi per tutto il Regno del Mino, quel luogo solo era stato molto pacifico: Onde il P. Gregorio l'hauea passata assai bene, & che al primo auuiso della morte di Nobunanga, era stato saccheggiato nel Ghifo il palazzo del prencipe, & vn Barone si era impadronito della fortezza, non dichiarandosi affatto, nè per vna parte, nè per l'altra.

Questo Barone era della setta de Tuchenxus, che sono i più pertinaci, & maggiori persecutori della religion Christiana, di tutti gli altri: Et cosi diede subito la nostra casa & Chiesa ad vn suo seruidore (benche gli ornamenti erano già posti in saluo) il quale in vn tratto le disfece per valersi de i legnami. Si dice che di qui à cinque, ò sei giorni si vniranno qui nel Meacò tutti i Baroni per il funerale di Nobunanga. Non si sà ancora bene, chi gli habbia à succedere nell' Imperio. I più dicono che sarà Sanxeci, almeno fra tanto che cresca vn figliuolo del Prencipe morto, che hauerà poco più di vn'anno di età. Ben pare à noi che i romori non habbino a finir quì, percio che al diuider delle Signorie, & de i regni, ha da essere il trauaglio. Nostro Signore

au Roy d'Ava fils de Nobunanga & à Faxiba, qui n'estoient qu'à trois lieuës de luy, & les pressa de le venir joindre: mais Aquechi les prévint & parut à la teste de huit mille hommes devant Justo qui n'en avoit que mille, tous Chrétiens, & déterminez à vaincre ou à mourir. Justo fut quelque temps en doute s'il devoit hazarder le combat avec des forces si inégales: mais se confiant en Dieu & en la justice de sa cause, il donne sur l'ennemi de telle force & avec tant de résolution, qu'il rompit l'avant-garde & tua deux cens des plus braves sans perdre un seul des siens. Ce premier choc étonna les rebelles. En même temps quelques Compagnies que Justo avoit laissé derrière, venant au galop pour avoir part au combat, les ennemis crurent que c'estoient les troupes de Faxiba & du Roy d'Ava; ce qui les jetta dans une telle consternation, qu'ils prirent tous la fuite. Aquechi qui avoit esté blessé dans le combat, se retira dans une forteresse voisine: mais ne s'y croyant point en seureté, il en sortit seul & sans train pour n'estre point connu. Il ne fit pas beaucoup de chemin qu'il fut rencontré par des païsans, lesquels l'ayant reconnu le percèrent de coups pour gagner les bonnes graces de Faxiba. Ainsi mourut le traître douze jours aprés avoir tué son Roy & son Bienfaicteur. Son corps fut pendu en un gibet de Meaco. Faxiba poursuivit le reste des rebelles qu'il mit tous à mort, & fit raser leurs maisons. Justo Ucondono ayant receu les conjouïssances de cette belle action, ne songea qu'à rétablir le Séminaire d'Anzuquiama, & voyant que la maison estoit brûlée, il le transporta à sa forteresse de Tacacuqui où Darie son père qui estoit retourné de son exil depuis la mort de Nobunanga en prit soin, ravi de finir ses jours dans un employ si saint & si avantageux au bien de la Religion.

VII.

AVVISI DEL GIAPONE DEGLI ANNI M. D. LXXXII. LXXXIII. ET LXXXIV.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus.
Kuchinotsu, February 13, 1583.

[*Extract*]

Saputo questo in Anzucì, vn Capitano lasciato quiui da Achecì, pieno di timore, senza indugio si ritirò à Sacomoto. Et già che sino all'hora da i ribelli era stato perdonato al Tempio, & altri edificij, di Nobunanga, ordinò Iddio per chiaro gastigo della sua superbia, che vn figliuolo dell'istesso Nobunanga, il quale staua li appresso, (non si sa per qual cagione, se non per essere egli bizzarro & di poco ceruello), fece por fuoco alle principali stanze, & più alte della Fortzzea, & si attaccò poi anco alla Città, & in breue spatio arse quasi tutta. In Sacomoto si trouauano le donne, figliuoli, famiglia, & parenti di Achecì, & molta gente n'era fuggita. Sopragiunse Faxiba con l'Essercito, & Giusto fù vn de i primi ad entrar dentro. Et fra tanto quelli di Achecì attendeuano à gettar gran copia di oro per le fenestre nel mare: Poi si rinchiusero nella piu altra tore, & quiui vccise le mogli, & figliuoli, & attacando fuoco alle mura, ammazzarono se medesimi. Non si può contare il numero de i Nobili, & altri che in questi otto giorni morrirono da Tacazuchi sino al Regno del Mino, altri per mano de i nemici, altri per mano di assassini. Si che venendo cinque giorni dopo la rotta il P. Giuseppe dal Sacai, vide vna sera correre per vn fiume più di cinque cento cadaueri. Di Sacomoto passò l'essercito vittorioso ad Anzucì, & di là ne'Regni del Mino, & di Voari, senza dar vita à nessuno di quei di Achecì: de i quali (come dicono) saranno già morti in questo poco spatio più di dieci mila. A noi, oltre gli altri affanni, drede gran pena che subito dopo la presa di Sacomoto,

stracchezza del uiaggio, non arriuarono à tempo: uolendo il Signore Iddio che la uittoria fosse principalmente de' Christiani, & che Giusto acquistasse il maggior nome di quanti Signori sono hoggidì in tutte queste parti. Ma l'essercito di Achecì perdutosi di animo al primo incontro, & sbigottito poi dal soprauenire de gli altri, si pose in fuga tanto vituperosamente, che con essere il luogo della giornata discosto dal Meacò ben quattro leghe, non si assicurarono di mettersi nella Fortezza di Xoregi, che staua nel camino, presa, come si è detto, da Achecì: Et cosi alla sfilata, gettando quà & là (per andar piu leggieri) lancie, & archibugi, passarono fuori del Meacò à vista de i nostri, verso le venti hore: Et volendo alcuni entrare nella Città, non fù loro permesso: Onde s'incaminauano alla volta di Sacomoto; ma molti non vi puotero giungere, percioche vscendo i Contadini, & altra gente dai Villaggi, & luoghi vicini, gli vccideuano, per hauerne i caualli, & le spade. Pure Achecì si ritirò con alcuna gente su'l tardi in Xoregi, ma sopragiungendo subitamente lo essercito di Faxiba, con tutta la diligenza, & guardia, & fuochi che si fecero d'ogni intorno, Achecì tenne modo di vscirne incognito, & quasi solo, & per quel che dicono, alquanto ferito. La mattina seguente quei ch'erano rimasti in Xoregi, si resero, & Acheci racconmandandosi ad alcuni Contadini acciò lo saluassero sino ad entrare in Sacomoto, con prometter loro molta copia di oro, essi per torgli la Scimitarra, & quel poco che hauea addosso, gli diedero vna lanciata, & gli tagliarono il capo, il quale non hauendo poi ardire i maluagi di presentare à Sanxeci, vn'altro fece l'vfficio, & cosi à quei della Fortezza, & ad altri furon tagliate le teste in tanto numero, & con tanto feruore, che in vna volta sola ne compaluero al palazzo di Nobunanga nel Meacò più di mille, & iui si metteuano tutte in ordine per l'Essequie: Essequie dico piene di gran fetore (per esser di meza state) quali meritaua la superbia di quel Tiranno, di modo che quando il vento veniua da quella parte, non si poteua stare nella Chiesa nostra di puzza. Questo tagliar di teste durò vn pezzo, & in molti luoghi. Et di là à due giorni

passando il P. Organtino con vn'altro Padre dinanzi al detto Palazzo di Nobunanga, viddero venire alcuni à fare offerta di più di trenta teste infilzate in vna corda, come se fossero tante teste di montoni, ò di cani, credendo la misera gente con vittime tali di fare vn sacrificio molto grato à quell'anima. Vi fù portato ancora quella di Achecì col resto del suo corpo. Et questo si miserabil fine hebbe colui, che habea hauuto ardire di mettere sozzopra tutto il Giapone, non hauendogli permesso la Diuina giustitia, dopo si horrenda congiura, più di dodici giorni di vita. La sua testa offerta prima alle ceneri di Nobunanga, fù poi per ordine di Sanxeci coniunta col bubo, & cosi tutto il corpo fù posto in Croce fuori della Città. La sudetta vittoria si hebbe la festa della Visitatione della Madonna. Et Sanxeci affermaua, che Giusto per essere Christiano era stato si auuenturato nella battaglia.

VI.

P. CRASSET, HISTOIRE DE L'EGLISE DU JAPON.

Tome I. Livre VIII.

Cependant le troisiéme fils de Nobunanga Roy d'Ava, ayant appris la mort de son père, partit aussi-tost avec toutes ses forces pour la vanger. Faxiba se joignit à luy aprés avoir fait tréve avec le Roy d'Amanguchi. Justo les prévint tous & fit marcher ses troupes à grandes journées pour conserver sa place de Tacacuqui, qui estoit prés de Meaco: mais Aquechi espérant le gagner avoit défendu à ses gens de luy faire aucun dommage. Il receut en ce lieu la lettre du Père Organtin & la lut; mais elle ne l'empescha pas de poursuivre sa pointe & de se joindre à Faxiba, & au fils de Nobunanga pour vanger la mort de son père. * * * * * * * * * * *
* * * * * * * * * * *

Le Tyran ayant pris la route de Meaco, Justo Ucondono qui estoit sur le chemin par où il devoit passer, en donna avis

ad vnirsi con lui. Et cosi mandò à dire à Giusta, che non hauesse paura, & che la fortezza si tenesse pure per suo marito. Fugli risposto con rendimento di gratie, & parole amoreuoli, come al tempo si conueniua. Et assicurossi tanto Achecì, che non dimandò per ostaggio, nè il figliuolo di Giusto, nè alcuno di noi altri, potendolo fare à sua posta, & sapendo che Nobunanga in tempo di Arachi l'haueua gia fatto. Et questo sospetto, e timore di potere egli dar delle mani addosso à i Padri, & fratelli, fu vna delle maggiori angustie, & afflittioni che tutti i Christiani del Meacò hebbero sino alla morte di Achecì.

Fra tanto arriuata la nuoua di Nobunanga à Faxiba Generale dello essercito contro il Mori prima ch'ella si diuolgasse, fece triegua con molto vantaggio. Et incontinente i Baroni cominciarono à venirsene in fretta alle loro Forttezze; & Faxiba si apparecchiò per andare contro Achecì. Giusto veniua molto ansioso & afflitto per tema che Tacazuchi, e tutto il suo stato fosse già in mano di Achecì: ma piacque alla Diuina bontà camparlo non solo da questo pericalo, ma etiandio da vn' altro non minore. Et fù, che le fortezze dei Gentili, prima che i Signori arriuassero, erano state in quel tumulto saccheggiate da i propri sudditi, & contadini. Il che non auuenne già in Tacazuchi, mostrando bene quanta differenza sia tra i Christiani, & gli altri Vassalli. Arriuato Giusto à casa, parue che tutti ritornassero da morte à vita. Et subito si dichiarò per inimico di Achecì, & riparata la fortezza il meglio, & più presto che fù possibile, si confederò con Sanxeci, & con Faxiba già di vno animo volti contro Acheci, con vn grande, & fiorito essercito. Et si vni con essi anchora tutta la Nobiltà di Cauaci, & Ceunocuni, doue stanno i principali Christiani di queste parti. Solo il Signore di Sanga, per hauergli Acheci promesso la metà del Regno di Cauaci, & vn cauallo carico di oro per distribuir fra soldati, aderì à lui. Et Faxiba, benche temuto da tutti per la grande potenza, & stato che tiene, nondimeno fa tanto caso di Sanxeci, e tanto rispetto gli porta, che è commune opinione, che lo habbia da rimettere nella Monarchia del Padre. Non sappiamo

quel che sarà, nè se egli haurà tanta bontà (essendo naturalmente questi gentili superbi) che potendo hauere l'imperio per se, voglia darlo ad vn altro. Hora Achecì tornato (come si è detto) dal sacco di Anzuci, si pose con dieci mila persone in vn luogo che si chiama Toba, quarto miglia dal Meacò, & presa già vna Fortezza molto importante, che si chiama Xoregi, che dista dal Meacò noue miglia, si andaua trattenendo, accioche i capi del Regno à poco à poco passassero à lui; & insieme staua à mirare quel che farebbe Faxiba. Questa sua dimora, & pigritia fù (come ho già detto) causa della sua distruttione; percioche quando volse poi andare sopra Tacazuchi, già tre Signori principali di quel Regno, confidati nel soccorso di Faxiba, che veniua marciando, erano vsciti in campagna con la sua gente: & erano rimasti d'accordo, che un di loro caminasse con le sue squadre per le montagne contro Achecì: L'altro che si chiamaua Ichendono, andasse con le sue luogo il fiume Giondo, ch'è il maggiore, & il più nobile di tutte queste parte: Et Giusto ch'era il terzo, si mettesse dentro ad un luogo detto Giamazacì, doue entrato, & hauuto nuoua, che Achecì già si veniua accostando, mandò cō diligenza à sollecitare Faxiba, che restaua ancora à dietro più di tre leghe, & egli fra tanto staua mettdeno in ordine i suoi, i quali erano meno di mille, ma tanto accesi di ardore di combattere, e tanto confidati nell'aiuto Diuino, che non si poteuano contenere, ma uoleuano uscire incontro al nimico. Et uedendo Giusto che l'essercito di Faxiba tardaua uoleua egli stesso andar'in persona a dargli l'auuiso del pericolo, nel qual si ritrouauano. Ma eccoti che quelli di Achecì arriuorno alle porte della terra: onde Giusto, come coragioso nella guerra, e molto confidato in Dio, fece aprire le porte, & diede adosso all'nimico con quei pochi che haueua ordinati in battaglia: Et si portarono di modo, che senza perdere più di un solo de i suoi, in un tratto guadagnarono più di dugento teste de'nobili di Achecì: Et dopo questo primo assalto giunsero per fianco gli altri due Baroni, & insieme uenne la nuoua che Faxiba, & Sanxecì stauano già uicini meno di una lega con più di uentimilla persone; benche per la

Ucondono à prendre son parti, il protegeroit les Chrétiens & leur feroit plus de bien que ne leur en avoit fait Nobunanga. Le Père Organtin luy répondit qu'il feroit tout son possible pour l'attacher à son service.

IV.

AVVISI DEL GIAPONE DEGLI ANNI M. D. LXXXII., LXXXIII. ET LXXXIV.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus.

Kuchinotsu, February 13, 1583.

[*Extract*]

Staua in quel tempo Sanxecì il terzo figliuolo di Nobunanga nella medesima Città del Sacai, apparecchiandosi con gente, per andare al possesso de'quattro Regni datigli da suo Padre. Ma subito che intese la morte di lui & del Prencipe suo fratello, si pose in ordine per tornare adietro, & farne vendetta: mà abbandonato in quel mentre da vna gran parte del suo essercito, prese partito di mettersi in vna principal fortezza del Regno di Cauaci, per nome Vzaca, guardata con presidio da vn suo Cugino chiamato Xichibioidono, il cui padre era già stato vcciso da Nobunanga, per leuargli lo stato; Onde si teneua ch'egli hauesse hauuto parte nella Congiura di Acheci. Oltre questo Capitano ve ne staua vn'alto detto Gorozaimon, affettionatissimo à Sanxecì, il quale essendo là ito con quei soldati che rimasti gli erano, il detto Xichibioidono Cugin fuo, non consentì mai ch'entrasse nella fortezza altri che la sua persona; Et cosi ammesso, & non potendo hauer en nelle mani il suo nemico, che staua senpre nel più alto d'vna torre, si accordò con Gorozaimon di occupar la fortezza con inganno; Et fù, che mostrando Sanxecì, già che non poteua far altro, di tornare ad imbarcarsi, & Gorozaimon di accompagnarlo con alcuna gente, per strada si attaccò vna finta zuffa con vna parte, & l'altra; & quelli di Gorozaimon, quasi ne hauessero il peggio, incominciarono à tutta furia fuggire in detta fortezza, talmente che à posta diedero luogo à gli altri di entrarui insieme con quella riuolta; Et cosi tutti d'accordo posero à fil di spada i feguaci di Xichibioidono, & egli dentro la torre si dice che, ò si ammazzò di propria mano, ò fu ammazzato da'suoi medesimi gentil'huomini. Et cosi rimasto Sanxecì padrone della Fortezza, pigliò grande animo & credito con'Baroni di Cauacì, i quali tutti andarono à visitarlo, & riconoscerlo per Signore, & egli mandò à piantar nel Sacai la testa del Cugino, con piacere di tutti: percioche realmente era stato vn crudel Tiranno, & ognuno gli desideraua la morte.

V.

AVVISI DEL GIAPONE DEGLI ANNI M. D. LXXXII., LXXXIII. ET LXXXIV.

Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus.

Kuchinotsu, February 13, 1583.

[*Extract*]

Al tempo che Nobunanga fu vcciso, i Signori, & Nobili del Rengó di Ceunocuni, il quale confina con quello del Meacò, erano iti alla guerra contra il Mori. Si che fu gran pazzia di Achecì, & principio della sua rouina, il non pigliare subito il possesso di quelle Fortezze, le quali, si per essere quasi distrutte per ordine di Nobunanga, come per essere sprouedute di gente, egli le haurebbe ottenuto facilissimamente, mandando cinquecento soldati di luogo in luogo à prendere ostaggi, & lasciando in ciascheduna qualche presidio. Et questo era l'agonia di quei di Tacazuchì, i quali tutti sono Christiani, trouandosi all'hora Giusto absente, per essere andato alla detta guerra del Mori, & vendendosi Giusta sua moglie con due figliuolini senza guardia, di modo che secondo riferisce il P. Giuseppe Furlanetto, che dopo due giorni tornò la di Sangà, fu chiara prouidenza d'Iddio nostro Signore, che leuò il ceruello ad Achecì, credendo egli che Giusto hauesse in ogni modo

condotto quiui per la fabrica della nuoua Chiesa, non lasciandoui altro che i pilastri, & tetto, che non si poteuano portar via. Acheci si astenne da inceilndi, ma salito nel più alto luogo della Fortezza, incominciò ad aprire li scrigni, e tesori di Nobunanga. Et quasi che indouinasse di hauer a durar poco in quella felicità, si pose à distribuirgli senza risparmio. Vi era fra l'altre cose gran quantità di piastre di oro, marcate, & distinte à ragion di pesi. Di questi à chi ne daua per settemila scudi, a chi per tre, & quattromila, à chi per duecento, e trecento, secondo la dignità de i Capitani, & soldati. Ne mandò anco al Dairi, & cinque Monasteri di Bonzi principali del Meacò, settemila per Monastero, da fare l'essequie di Nobunanga, quantunque si crudelmente assassinato da lui. Di maniera che tutto ciò che in spatio di quindici, ò venti anni, con tante fatiche, & con tante guerre si era quiui racolto, fù dissipato in ispatio di due, ò tre giorni.

Dopò questo se ne ritornò Acheci alla sua fortezza di Sacomoto per continouare la conquista de'Regni vicini, attendendo fra tanto à guadagnarsi la volonta de'soldati veterani, & altri del la parte di Nobunanga. Alla medesima fortezza di Sacomoto giunsero i nostri campati dell'Isola, andando al Meacò; & non furono mal riceuuti da Acheci, anzi trattando egli nell'istesso tempo di tirare à se Giusto Vchendono (che è la colonna di questi Christiani, amicissimo nostro, & brauiffimo Capitano) instò al P. Organtino, che procurasse questa vnione, & il Padre, conforme al tempo, rispose con buone parole; ma poi auuisò à parte Giusto, che per nissun modo si confederasse con tal tiranno, ancor che per questo vedesse tutti noi altri posti in Croce; & che cosi era seruitio di Dio N. S. Il Padre fu anco à vedere il figliuolo di Acheci, & non giouò poco la diligenza; poiche da lui si ottenne vn saluocondotto, senza il quale correuano i nostri gran pericolo di essere mal trattati per viaggio, essendo in quei giorni rotte le strade, & piene di ladronezzi per tutti quei Regni. Co'l detto saluocondotto, & con vn paggio di Acheci (al quale donò poi il P. Organtino vna Ombrella dell'India, con mille gratie) i nostri

gionsero al Meacò sani, & salui con quanto portauano seco. Erano iui già tenuti per morti; Onde maggior fu l'allegrezze de'Padri, & Fratelli di quella Residenza, vedendogli arriuare fuori d'ogni loro speranza; Et certo che non fù senza miracolo d'Idio, che sapendo Achecì la stretta amicitia de'nostri con molti soldati Christiani suoi nemici, lasciasse andargli si facilmente.

III.

P. CRASSET, HISTOIRE DE L'EGLISE DU JAPON.

Tome I. Livre VIII.

S'estant donc asseuré de Meaco & sçachant que tous les thrésors de Nobunanga estoient dans sa superbe ville d'Anzuquiama, il fait marcher aussi-tost ses troupes de ce costé-là pour s'en rendre maistre. Le Gouverneur de la place informé de son dessein, fit incontinent rompre le pont qui estoit sur le bras d'un lac par où l'armée devoit passer. Pendant qu'Aquechi le faisoit réparer, les Pères eurent le loisir de se sauver avec leurs jeunes Séminaristes dans une petite Isle à quelques lieuës de-là & d'y transporter les ornemens de leur Eglise. Le Pont estant refait, Aquechi s'approche de la place & s'en rend maistre aussi bien que de la Citadelle, sans beaucoup de résistance. On ne peut dire les thrésors qu'il y trouva. Nobunanga avoit esté quinze ans à les amasser, & cela pour un perfide qui devoit luy oster la vie. C'est ainsi que la pluspart des gens travaillent pour amasser du bien à des inconnus & souvent à leurs propres ennemis, qui s'enrichissent de leurs dépoüilles.

Aquechi partagea ce precieux butin avec ses gens, donnant à l'un dix mille, à l'autre vingt mille ducats: si bien qu'il épuisa en trois jours ce que l'avarice & l'injustice de Nobunanga avoit amassé en plusieurs anuées. Il ne se contenta pas des thrésors de ce Prince, il pilla encore la Ville, & ayant sceu que le Père Organtin avec ceux de son Séminaire s'estoient retirez à une Isle voisine, il luy manda que s'il vouloit engager Justo

ad Anzucì, lo stesso giorno ad hora di vespro era iui giunta la mala nuoua; Con quanto spauento, & perturbatione di tutti, lo lascio pensare à V. Paternità tanto piu che non si poteua ben sapere la certtezza, per essere stato da vn' Capitano di Nobunanga tagliato vn ponte principale, accioche i tradittori non passassero tanto in fretta ad Anzucì: & cosi non vi puotero andare sin'al sabbato, hauendo Achecì con gran diligenza rifatto il ponte (cosa che pareua impossibile, per essere il fiume rapidissimo, & molto profondo). Era questo mezzo erano tante le cose che in Anzuci si diceuano, & erano tanti, e tanto spessi gli spauenti, aspettandosi di hora in hora i nimici, che nessuno sapeua che farsi, & ogni cosa andaua sozzopra: fuggiuano con le robbe chi qua, & chi là: altri anticipauano à saccheggiare prima che i rebelli venissero. Et vno de' nobili, che ad instanza di Nobunanga hauea quiui fabricato, posto da se fuoco nell'edificio, andò ad vnirsi con Achecì. I nostri, priui d'ogni humano soccorso, determinarono di ritirasi in vna Isola di vn Lago vicino, chiamato Vochinoxima, & ciò di consiglio d'un finto amico, habitatore della detta Isola, il quale si era accordato co'i Barcaruoli di spogliare, & vccidere i Padri. Et cosi il Venerdì il P. Organtino con ventiotto di casa imbarcò, lasciando per guardia delle stanze Vincenzo Giaponese con sei, ò sette persone. Portauan seco vn Crocifisso, & vna piccola Imagine della Madonna, i Candelieri d'argento, turibolò nauicella, calice, & vn'ornamento di velluto cremisì lasciato quiui dal P. Visitatore, & quelle poche cose di prezzo che ci erano. Andauano vestiti quasi tutti alla Giaponese, per non essere conosciuti, due ne veniuano più à dietro, cioè il P. Giouan Francesco, & il fratello Diego Pereira. L'vno, & l'altro fu molto ben palpato, & ricercato: Et perche al P. Francesco pesaua una manica, credendo i ladroni che vi portasse argento, per isgannargli ne cauò il breuiario, il quale subito gli fu tolto, & non glielo resero più. A Damiano Giaponese fu leuato il cappello, & un manto che portaua sopra la veste, & non la potendo spogliare cosi presto, gliela stracciarono dinanzi & di dietro, con che uscì

loro delle mani. Imbarcati poi con quell'ingannatore, presto si auuidero che staua loro apparechiato qualche aguato. Et cosi cominciarono racommandarsi à Dio, & à fare atti di contritione. Giunti all'Isola, in iscambio del nollo pattuito, si posero i barcaruoli à dimandare la metà della robba che nostri portauano, & uolendo essi artenersi all'accordo, & allegando uarie ragioni, furon forzati à salire da due, ò tre giuli che in altri tempi soleuan pagarsi per quel traghetto di dodici miglia, sino alla somma di settanta e piu scudi; & non contenti anco di questo, persuadendosi pure che i nostri tenessero qualche gran tesoro nascosto, si risolsero, come si è detto, di uccidergli con la prima occasione, più segretamente che fosse possibile. Fra tanto gli posero in una stalla doue teneuano molta robba di mal'acquisto. Fra questa robba ascosero i Padri un giorno le cose di più ualore, & la notte poi cauatele destramente, le mandarono per un fedelissimo Giaponese che seco haueano, alla uolta della montagna, per nasconderle quiui, e tornarle poi à pigliare come i tumulti si acquetassero. Et piacque alla bontà del Signore, che uenuti questi ladroni à scuotergli, non trouarono niente di quel che cercauano. Onde sdegnati, trattauano di mandargli per mare in un'altro luogo più rimoto, doue potessero à suo piacere togliere loro la uita; ma il Signore iddio gli aiutò per mezzo di un buon Christiano, il quale hauendo vn suo nipote molto fauorito di Achecì, gli scrisse in raccommandatione de'Padri con tanta efficacia, che fù loro mandata vna barca à tempo con ordini & prouisioni tali, che non solamente furono lasciati liberi, ma etiandio ricuperarono tutte le bagaglie, & ornamenti sacri. Mentre i nostri passauano questi trauagli, Achecì (come incominciai à dire) con l'essercito giunse ad Anzucì, doue non si vedeua altro che scalar case, & vuotarle senza alcuna resistenza, essendo quasi tutti i terrazzani fuggiti. Et i nostri anchora sentirono la sua parte del danno, poi che la Casa doue si era fatto apparecchio di molte cose necessarie per quel Seminario, fu saccheggiata più d'vna volta, leuandone sino alle finestre, porte, & sofitti delle Camere, & tutto il legname

DAI NIPPON SHIRYO

(*Japanese Historical Material*)

PART XI. VOLUME I.

European Materials

I.

AVVISI DEL GIAPONE DEGLI ANNI M. D. LXXXII., LXXXIII. ET LXXXIV.

Letter from Father Luis Froes to the Father General
of the Company of Jesus.
Kuchinotsu, February 13, 1583.

[*Extract*]

Intesa nel Sacai la morte di Nobunanga, il Rè di Micaua, & Anaimandono andati (come dianzi si disse) à vedere quella Città, incontinente diedero la volta per le fortezze loro. Trouarono gia presi con guardie i passi & le strade. Il Rè di Micaua per essere meglio proueduto di gente, & denari, parte con minaccie, parte con donatiui, finalmente passo. Anaimandono partendo più tardi, & con meno comitiua, fu più suenturato : poiche assalito più di vna volta, perde prima le bagaglie con tutti e suoi, & all'vltimo fu anch'egli vcciso.

II.

AVVISI DEL GIAPONE DEGLI ANNI M. D. LXXXII., LXXXIII. ET LXXXIV.

Letter from Father Luis Froes to the Father General
of the Company of Jesus.
Kuchinotsu, February 13, 1583.

[*Extract*]

Et essendo (come si è detto) piu di dodici leghe dal Meacò

I-3E-99

CONTENTS.

PAGE

I. Avvisi del Giapone degli anni M.D. LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV.—Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus. Kuchinotsu, February 13, 1583.............. 1

II. Avvisi del Giapone degli anni M.D. LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV.—Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus. Kuchinotsu, February 13, 1583.............. 1

III. P. Crasset, Histoire de l'Eglise du Japon. Volume I. Book VIII... 5

IV. Avvisi del Giapone degli anni M.D. LXXXII., LXXX. et LXXXIV.—Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus. Kuchinotsu, February 13, 1583 6

V. Avvisi del Giapone degli anni M.D. LXXXII., LXXIII. et LXXXIV.—Letter from Father Luis Froes to the Fatner General of the Company of Jesus. Kuchinotsu, February 13, 1583.............. 7

VI. P. Crasset, Histoire de l'Eglise du Japon. Volume I. Book VIII. 11

VII. Avvisi del Giapone degli anni M.D. LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV.—Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus. Kuchinotsu, February 13, 1583.............. 13

VIII. P. Crasset, Histoire de l'Eglise du Japon. Volume I. Book VIII. 14

IX. Avvisi del Giapone degli anni M.D. LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV.—Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus. Kuchinotsu, February 13, 1583.............. 15

X. Avvisi del Giapone degli anni M.D. LXXXII., LXXXIII. et LXXXIV.—Letter from Father Luis Froes to the Father General of the Company of Jesus. Nagasaki, January 2, 1584.................... 17

XI. P. Crasset, Histoire de l'Eglise du Japon. Volume I. Book VIII. 17